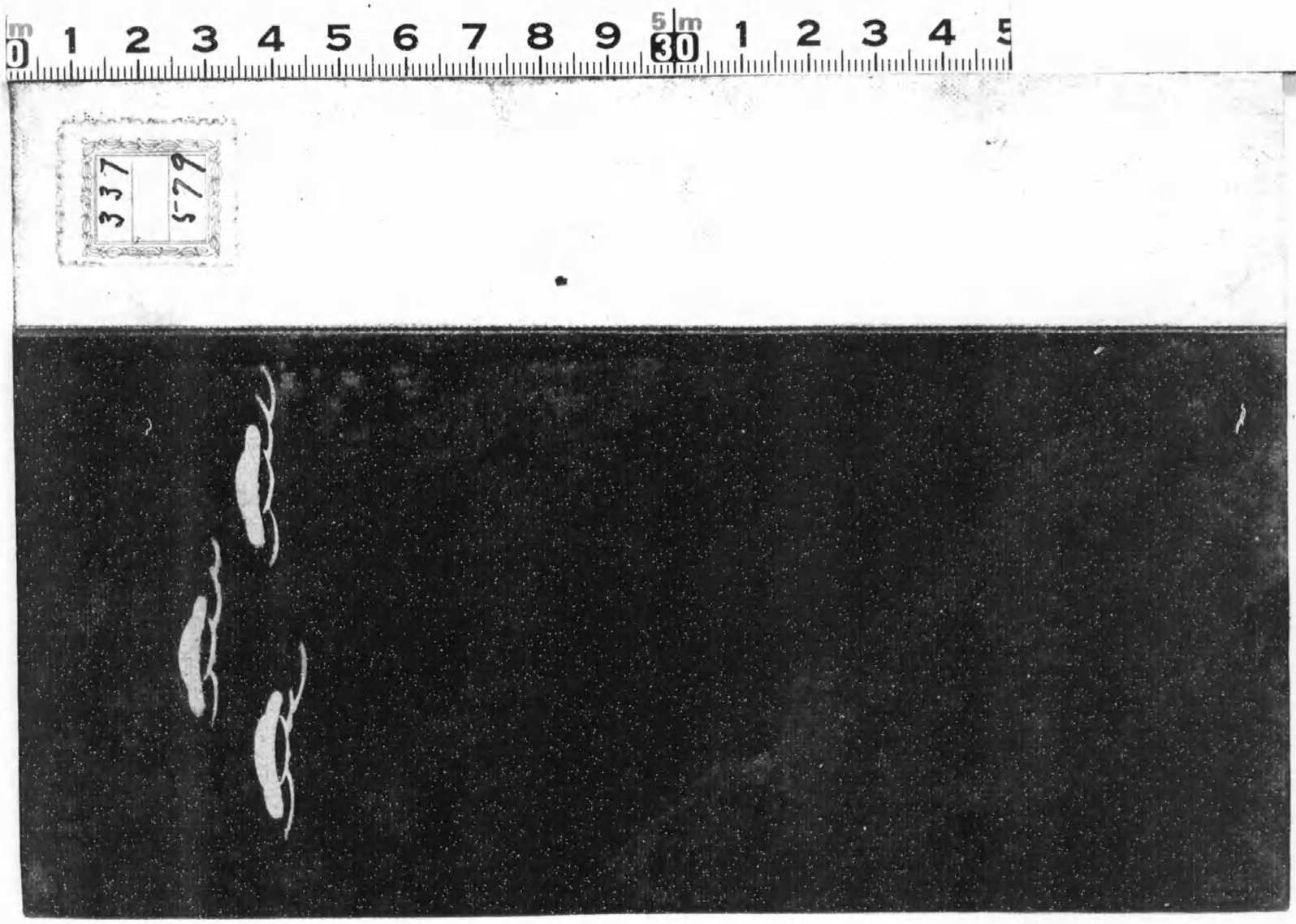
始


337
579

特220
789

隨園集

昭和二十一年二月購入
帝國圖書館藏

テニ庵松老
（月十年一十和昭）

はしがき

本書は舊著「思ひ出」の續篇とも稱すべきものである。

「思ひ出」を書いてから、早八年の歳月は流れた。八年の星霜は、決して、短いものではない。

其の間の思ひ出を主とし、之れに「思ひ出」に載せ得なかつた古き思ひ出をも一緒に隨筆風に書き連ねたのが本篇である。

尙其の他一二編の飜譯や、俳句や、感想なども加へてゐる。

要するに、種々雜多のものゝ寄せ集めに過ぎず、各々獨立の題目を無系統に並べたものだから、其の中のどれでもいゝ任意の一つを讀んで見て、若しも面

白かつたら、次を讀んで貰へばそれでいゝ。若し、面白くなかつたら、其一篇だけで澤山である。

昭和十一年十一月三日

目黒老松庵にて

著者識

目次

枝折門……一
鵜……三
ツヌケズ……五
稗……一一
俳句と云ふもの……一四
ピアチゴルスキーを聽く……二四
蒐集……二六
樂燒……三〇
ある男……三二
雪達磨……三七
幽靈を見なかつた男……四〇

芋掘……四四
音樂を聽く……四六
左青の俳畫……五四
成層圏飛行……五七
猫とクローバー……六一
かる……六三
一升桝は一升桝……六六
蠅取週間……六八
天井の怪……七六
御仁愛……八〇
地震・雷・火事・〇〇……八三
巣箱……八七
前畑ガンバレ……九〇
鬼城翁……九三
鶴の一聲……九八
H・G・ウエルズの科學小說……一〇一
三題ばなし……一〇四
熱帶魚……一〇八
空の寵兒……一一〇
ももんぐわ……一一七
お笑ひ草……一二一
無花果……一二四
目黑の秋刀魚……一二九
非常時と云ふ言葉……一三三

三つのW……一三五
山雀……一四〇
水だ！マスクだ！スキッチだ！……一四三
毛生薬……一四九
其の頃を語る……一五三
雪辱目ざして……一六一
笑話……一六四
雑咏集……一八一
終りに……一九七
著書目錄……一九九

枝折門

此の屋敷に一本の大きな松の木がある。其の松の木の傍に、古びた枝折門がたつてゐる。先達の事であつた。此の門に何とか書いて見たい衝動にかられた。

幸ひ此の門には、古い舟板が嵌められてあつて、其れが如何にもお書きなさいと云はんばかりである。そこで、老松庵と書く事にした。

墨で書いては、舟板が黑つぽいので、目立たない。さうかと云つて、エナメルやペンキでは、尙更面白くない。

考へた揚句、白インキで書く事にした。

足繼を持つて來て、書いて見たが、どうもインキがうまく板に附かない。

其れに少し字が小さい樣であつたから、思ひ切つて、消してしまふ事にした。

濡雜布で拭いたら、案外譯なく落ちた。そこで、やりそこなへば又消せばよい

と思ふと大膽になつて、今度は思ひ切つて大きな字で書き始めた。ところがどうだらう。今度は非常によく板に附いて、かすれる事も無く、樂々と書けた。

之れは全く、濡雑布で拭いたのがよかつたので、まだ濡れてゐる板に書いた爲、インキがうまく附いたのである。

怪我の巧名とは斯んな事を云ふのだらう。

（一一・一〇・一五稿）

二

鵯（ひよどり）

去年もさうであつたが、今年もさうである。

鵯の聲を僕が始めて聞いたのは、十月十五日と云ふ日である。

鵯は秋、山から平地へ下りて來る鳥だから、今時分其の聲を聞く事は自然であるのだが、二年も續いて、十五日と云ふ日に、決つて聞くのが、偶然としては、餘りにも偶然だ。

十月十五日と鵯――何だか其の間には因緣がありさうである。

十月十五日とはと考へて見ると、云ふまでも無く、獵の解禁日である。そこで、此の問題も略解決された樣である。鐵砲を恐れて、斯ふした人家近くの安全地帶へやつて來るのだらう。

十月十五日と鵯――一寸面白い關係では無いか。そして、冬中庭の近くの木

で啼き交す。

時には庭に遊びに來る。

朝雨戸を開けると必ず二三羽は飛び立つ。

來て居る場所は、何時も青木の枝である。飛び立つた後には、赤い青木の實が、澤山こぼれてゐる。

鵯や食ひこぼしたる青木の實

（一一・一〇・一六稿）

ツヌケズ

昭和四年十二月より五年春へかけての大患以來、青柳先生のお勸めに依り、健康增進の爲、魚釣をやつた。

幸ひ、長府の沖は、非常に、魚の多い場所であり、海岸まで行くにも、十丁と離れてゐなかつたので、天氣の好い日は、殆ど毎日出かけた。

外浦海岸から、モーターの附いた小舟で出かけるのであるが、季節に依り、又魚の種類に依り、釣場は常に變つてゐた。大抵、滿珠干珠の二つの島の近くで釣糸を垂れるが、時には、モーター船で、四五十分もかゝる樣な沖合に出て釣る樣な事もある。

大概、朝早く出て、午前中には歸つて來たが、たまには、辨當持參で出かけ、殆ど一日中、海で暮した樣な事もあつた。

朝早い時は、日の出を、船中から、見る様な事もある。日の出前の海の景色は、到底筆舌のよくするところではない。

而して、釣りは、毎年四月頃に始め、十一月頃まで繼續するのである。時には十二月、一月と云つた寒い時季に出かけた事もある。

斯くする事足かけ四年、聊か釣りのこつも判りかけた樣な氣がする。

大抵の魚は、釣り上げる間の手應へで、略其の何であるかがわかる樣になつた。例へば、鮪の如きは、恰も、雜巾でも釣上げる時の樣な、ふわ〳〵した感じのするものである。又小鯛は、釣上げる途中で、すつと輕くなつて、或は逃げたのではないかと思ふ樣な事がある。之れは、釣上げる速度より、鯛の方が、先へ泳ぎ上る爲である。其の他、魚の種類に依つて、總べて、手應へが、異るものである。

前にも述べた樣に、長府は、魚の種類と、其の量に於て、非常に惠まれてゐ

るから、全然一尾も釣れないと云ふ樣な事は先づ無い。併し、時には、當りが惡くて、十尾に足らぬと云ふ憐れな事もある。俗に十尾に足らぬ不漁の事を、釣師の仲間ではッヌケズと云ふさうである。ッヌケズとは、ッの字が拔けないと云ふ意味で、卽ち十尾に足りない事を云ふのである。一ッ、二ッ、三ッ、……九ッと云ひ、十になつて初めてッの字が無くなる事から來てゐる。

けれ共、斯んな事は、極く稀れで、釣れる日には、百や、二百は、それこそ、朝飯前の仕事である。之れは、こちらが、上手だからと云ふ譯では無い。場所と、潮の加減に依るものである。

大きな獲物では、八百匁もある大鮪を釣上げたり、カワハギのどえらいやつや、鱶の仔を、一日に、七尾も釣つたりした事もある。

「逃げた鯛は大きい」と云ふが、强ち負け惜しみとばかりは限らない。實際、大きいのは、よく糸を切つて、逃げるのである。舟端まで來て、大きい奴を、逃

がした時など、實に殘念なものである。

釣つて一番釣り甲斐のないのは、彼の邊で、俗にネコと云ふ二三寸の小魚である。一寸鯊に似た縞のある、目玉と、口の大きい魚である。ネコと云ふのは、猫も食はないと云ふ事から來てゐる。骨ばかりで、食つて少しも美味しくないからさう云ふのであらう。之れが釣れると、皆舟端に叩き付けてやる。魚こそいゝ災難だ。

之れ以上に、憎くらしい奴は、河豚である。河豚が來たら最後、他の魚が釣れなくなるばかりでなく、スヂを切つて仕方がない。斯んな時は、急いで、所を變へるより他ない。釣つた魚は、大抵、夕飯の食膳を賑はすのであるが、時には、釣り上げたぴち〳〵してゐる奴を舟の上で、塩燒等に料理して食ふと、とても美味しいものである。

父上が、炭坑に行かれた時は、わざ〳〵炭坑まで獲物を持たせてやつた事も

ある。炭坑の人達の口には、斯んな新しい魚は、容易に這入らないのだから、非常に喜ぶのである。

時には、父上も、母上も、妹達も、一家總出で、行つた事もあるが、大抵益岡の船頭で、舛谷、來島兩君と一緒に出かけた。

餘りいゝ天氣の時は、模型飛行機を持つて行つて、釣りはそつちのけで、飛ばしたりした。他の漁船の人々が、驚いてゐた。

最後に、今に不思議に思つてゐる海の怪物の話を記して終りとする。

或時の秋であつた。滿珠島の附近で、大きな頭を波間に出して、「ウォー」と云ふ樣な聲をして吠る、魚とも獸ともつかぬ、得體の知れぬ、巨大なる動物に出合つた事があつた。

其の時、二匹居たが、舟を近寄せると、何處かへ逃げてしまつた。

益岡の云ふには、時たま長府の沖で見る事があるさうである。遠くであつた

からよくわからないが、オットセイか、アザラシの様な頭をしてゐた。或は、鯨の一種ではないかとも考へてゐるが、兎に角、末だに何物であるか解らない。

（一一・一〇・二八稿）

一〇

稗（ひえ）

座敷の庭は一面の芝生になつてゐる。ところが、ほんの少しばかり芝が無く、黒土が見えてゐる所があつて、何となく穢ならしい。

去年の夏の事であつた。何とかこの黒土の見えない様にしたいものと思つて、考へた末「稗蒔（ひえまき）」から思ひついて、稗を蒔いて見る事にした。

四五日もすると、一面に、薄青く稗が生へて來た。

稗はずん〳〵延びて行つた。

あまり延び過ぎると、芝との釣合がとれなくなるので、草刈機で切つてしまつた。暫くすると、又延びて來る。又切る。斯んな事を二三回繰返してゐる中、面倒になつて、延びるがまゝにまかせておいた。其の中、ぼう〳〵と稗は生茂つて、蛇や蜥蜴（とかげ）の棲（すみか）となつてしまつた。ところが、八月の末頃になると、そろ

〳〵穂が出來て、やがて稔つて來た。

雀が何羽も來て、之を啄む樣になつた。

斯ふなつて見ると、むざ〳〵雀の餌にしてしまふのが惜しくなつたので、案子山を立てた。けれどもやつぱり雀は來る。今度は、糸を張り廻して、其れに紙のびら〳〵を下げて見た。案山子より、此の方が、慥に、効果的であつた樣である。併し、其の爲、庭の風致は著しくそこなはれた事は勿論であつた。が、兎に角、斯ふして、雀の害からは、どうやら逃れた。

今年の夏は之に懲りて、芝の種を蒔く事にした。芝の種は稗と違つて、仲々生へにくいものである事を初めて知つた。何しろ、蒔いて約四十日もして、漸く、其れらしいものを、認めたのだから。幾度か駄目だと思つて、蒔き直ししやうかと思つた位であつた。併し、今はもう立派に成長して、黒土も見る事が

出來なくなつた。

（一一・一〇・一五稿）

俳句と云ふもの

俳句は、以前から、嫌ひではなかつた。何時か始めたいとは思ひながら、遂其の機會が無かつた。

青柳先生からも屢勸められたりしたが、どうも機が熟さないと云ふものか、やつて見る氣になれなかつた。

ところが、一昨年春、麻布で、寢込んでしまつて以來、とう〳〵やり始めた。けれ共、初めは、只、無茶苦茶に、十七字を、竝べたに、過ぎなかつた。

其の年の秋、麻布から目黒へ移つて來ると、幸ひ、近くに、金澤光洲と云ふ俳句の宗匠が居たので、此の人について、本式にやる事にした。

其れが昨年の一月の事である。

そして、其れこそ、ほんたうの「いろは」から勉强し始めた。

だから、句を始めて、未だ二年そこ〳〵の僕である。

故に俳句を語る資格等ない。

けれ共、此の二年間に感じた事は二三ある。

物事を何かやり出すと「凝る」のが僕の癖である。此の「物に凝る」と云ふ事が、僕の長所でもあり、又短所でもある。其れは兎も角、こゝ二年間と云ふものは、實に熱心に句作を續けた。

昨年は一日平均三句位、今年は一日五句以上は作つてゐる。

即ち、最少限度三千は作つてゐやう。

之れをいち〳〵光洲さんに送つて、添削をお願ひするのである。

先づ四日に一度位、二十句宛郵送すると、直に、評や訂正をしてくれる。初めは殆ど眞赤に直されたものだが、追々要領がわかつて來て、〇も附く樣になつた。

斯んな事は、いくら敎はつても、上手になるものでは無い。自分で、こつこつ苦作するより外に、上達の途はないものゝ様に考へる。兎に角、理窟を云はずに、せつせと作つてゐる中に、自ら途も開けて來る様である。

前置きが大分長くなつた様であるから直に本題にかゝらう。

第一は、俳句は、病人に特に適してゐる娯樂だと云ふ事である。

俳句は、其の詩形が、十七字と云ふ、頗る短いものであるから、病人や、靜養中の人に、最も好適である。

病人は、一體に、直ぐ疲れやすいものであるから、長篇の讀物は、不適當である。又刺戟の强過ぎる詩、歌等も病人には害あつて益ないものである。

然るに、俳句は、最も短い詩であり、而も淡々として水の如きものである。作るにしても、讀むにしても、最も病人の親みやすい文學であると云ふ所以である。

次に、俳句をやり始めて、有難く思つてゐる事は、今まで無關心であつた、大自然の姿を、興味を以つて、見始めた事である。

四季の移り變りは勿論、一木一草に至るまで、等閑にふする事なく、總べてに、多大の關心を持ち始めた事である。今までは、暑いと云つては苦しみ、寒いと云つては不平をこぼしてゐたものが、暑ければ暑いで、寒ければ寒いで、そこに又自然の妙味を感ずる様になつて來た。暑いのは誰しも暑いが、其れから句が生れる喜びは、又大きいものである。

最後に、之れは、俳句の直接の功德ではなく、其の副産物と云ふべきであらうが——そして、又僕の場合に、限られてゐるだらうが——字の稽古が出來ると云ふ事である。

字を覺えると云ふばかりでなく、字が多少上手に書ける様になる事は確かの様である。

僕は人も知る惡筆で、學校の頃は、何時も六十點と相場がきまつてゐた。然るに、此の二年間と云ふものは、毎日二三枚宛短冊に句を書いて長府に送るので、嫌でも書かなければならない。嫌々ながらも、書いてゐる中には、どうにか字になつて來る。

其の外、俳句の効能書を並べれば、澤山あるであらうが、何だか我田引水になりさうだから、此の邊で止めておく。

兎に角、俳句は、始めてよかつたと、しみ〴〵思つてゐる僕である。今後も光洲、鬼城兩先生の指導のもとに、一層精進する考へである。

次の一文は、本年五月、家庭の人々への參考として記したものである。併せて、一讀を乞へば、又幸ひである。

俳句に就て

一、俳句は十七字の文學である。

俳句は五、七、五卽ち十七字を以つて其の標準としてゐる。標準であるから必ずしも、十七字と限る必要はない。標準字數より、多少の增減はあつても差支へない。

二、俳句には必ず季のもの（季語）を讀み込まねばならぬ。

「季のもの」卽ち「季語」とは、時候の變化に依つて起る現象を云ふのである。卽ち、春、夏、秋、冬の變化に依つて起つて來る總べての時象を云ふのである。而して、俳句は「季語」を必ずかりて作らねばならぬ。「季語」の無いものは、眞の俳句ではない。今具體的に「季語」を例示して見やう。

季／分類	春	夏	秋	冬
時候	日永	暑し	立秋	師走
天象	東風	五日雨	月	北風
地象	雪解	清水	花野（秋草の咲き亂れし野）	氷
人事	雛祭	盆踊	稲刈	襟巻
動物	蝶	螢	雁	河豚
植物	梅	苺	菊	山茶花

俳句にて俗に「季重り」と云ふ事がある。即ち一つの句に、二箇以上の「季語」のあるものを斯く云ふのである。例へば

山空に晝の月、（季語）秋 ある春、（季語）春の風、

「季重り」を一概に惡いと云ふのでは無い。一方を主として、一方を從とすれば差支へない。即ち一方を材料とすればよいのである。

例句の場合では、月が春の風の材料である。

三、俳句は、主として、景色を讀む文學である。

俳句では、叙景を主とし、理窟や感情（人情味）を露骨に表す事を嫌ふものである。故に句作に當つては、つとめて自然のありのまゝの姿をありのまゝに客觀的に表現する事が一番大切である。俳句に理窟の禁物である事は論を俟たぬが、昔から所謂名句として人口に會炙されてゐる句で、人情味豊な句も相當あるにはあるが、眞の名句は、決して其れ等を云ふのでは無く、どこまでも叙景的表現のものを最上としなくてはならぬ。即ち芭蕉の

古池や蛙飛び込む水の音

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

等を吾々はお手本とすべきである。

従つて、先づ俳句を作るには、寫生と云ふ事を最も必要な方法とする。寫生とは、自然を充分觀察し、研究して、句作する事である。

平易に云へば、自然のありのまゝを寫す事に他ならない。大自然を子供の境地で見て作つた句が一番尊い。理窟や感情でコネ上げたものは嫌氣がさす。

四、俳句には、多くの場合、切れ字を必要とする。

例へば

湖の水まさりけり　五月雨

舟人にぬかれて乘りし時雨かな

荒海や佐渡に横たう天の川

等に於て○印を附したものが切れ字である。此れ等の切れ字は多くの場合、俳句には必要である。但し、茲に注意すべきは、一句中に「や」「かな」「けり」等の切れ字は、二つ重ならない様した方がよい。

即ち一句に切れ字は一つでよい。

五、最後に俳句の上達法は、所謂「看多」「做多」「商量多」と云ふ事が最も肝要である。

「看多」とは「多く見る」事で先人のよき句を多く讀む事である。第二の「做多」とは「多く作る」事で、句を自分でせつせと作つて見る事である。第三の「商量多」は「多く工夫する」事で、即ち多く推敲して見て、自分の句を反省して見る事である。多く作つても、作り放しではいけない。必ずよく繰り返して、考へ直して見る必要がある。

右の「三多」の中で、最も中心をなすものは、第二の「做多」即ち「多く作る」と云ふ事である。兎に角、上達法は、自分で作つて見るより他に方法は無いものである。人から教へられて上達するものではない。所謂禪の「悟り」と同じ様なものであらう。

（一一・一〇・二七稿）

ピアチゴルスキーを聴く

「ピアチゴルスキーを聴く」と云つても、僕はラヂオで聴いたばかりである。其れは十月七日の夜であつた。

昨年フォイヤーマンやマレシャルの名演を聞いた時は、大いに感心したものであつたが、今度は實際のところ、其れ以上にいゝと思つた。

フォイヤーマンのテクニックの正確さは、他の追從を許さぬところであり、マレシャルのフランス的香氣は、之又セロ藝術の極致たる事は、誰しも否定する事の出來ない事實である。

併し、ピアチゴルスキーに至つては、兩者に無い、より高次の或もの(サムシング)を持つて居ると云へやう。一言に云つて見れば、本當のセロの音を出し得る人である。あの夥(おびただ)しい音量は、全く以つて、彼獨特である。「情熱のカザールス」と云はれるのも亦故あるところである。カザールス引退後、第二のカザールスとして、明日のセロ界の王座を占むる者は、彼其の人であらふ。

(一一・一〇・一五稿)

蒐集（コレクション）

人間には蒐集癖がある様である。

或人はマッチのレッテルを集めて見たり、或人は郵便切手の蒐集に熱心であつたり、或人は馬の玩具を集める事に凝つたりする。

第三者から見れば、子供らしいつまらぬ事にしか見えないであらうが、御本人は大眞面目なのだから面白い。

先日何とか云ふ外人で、世界最小の物ばかりを集めてゐる人が日本へもやつて來て、ラヂオ放送をした。話に依れば、世界中を股にかけて、小さい物小さい物と物色してゐるのださうだ。特に面白く思つたのは、洗はふとして水に入れた小さな銀のスプーンが浮いてしまつた話や、象牙の象の造り物が、窓からの微風で、吹飛んでしまつて、其れが捜索に一日を要して、尙數箇は遂に見當

らなかつたと云ふ樣な事を話してゐた。

僕も蒐集では人後に落ちない方であらう。

僕のは一つの物に終始するのでは無く、あれこれと移つて行くので、所謂蒐集癖とでも云ふのであらう。其の代り、一つの物に、徹底しない恨みはある。

今まで集めた物を列記して見ると(一)ペン先、(二)ボタン、(三)古切手、(四)ホテルのマーク(五)人形、(六)飛行機模型等々である。

而して、右の中(三)(四)の如きは、今は世界中のものを一組にして賣つてゐるのがあるのだから、蒐集の中へは入らないであらう。が、ペン先とボタンは、數百種集め得た。けれ共、此れとて全世界に渉つて集めた譯では無く、專ら日本內地に限られてゐるのだから、人に誇り得る程度のものではない。

次に、前の外人の眞似では無いが、小さい人形の蒐集は大分古くからやつて

ゐる。大連、台灣等へ行つた時も買つて來た位だ。併し、之れは僕一人の蒐集になると云ふより、家族全員の即ち家族總動員での蒐集になるものである。

次に少し纏つたものでは、飛行機の實物模型がある。之れは皆最新式の各國飛行機の五十分の一のスケールモデルであつて、今四五十台は所有してゐる。皆何れも實物に寸分違はぬ樣作らせたのだから一寸見物である。

之れだけの纏つた最新の飛行機モデルを持つてゐる人は、外國はいざ知らず、恐らく日本にはさう無いだらうと聊か自負してゐる。

近來、俳句をやる樣になつて、又々僕の蒐集癖は頭をもたげて來た。

其れは大家の短冊の蒐集である。

芭蕉、蕪村、一茶……と集めたいのだが、時代ものはとても齒がたゝない。そこで、先づ手近からと、現代俳人中第一流の人々の短冊の蒐集につとめてゐる。

之れが案外又むつかしい。

併し、どうやら一流どころの短冊は一通り揃へ得た樣だ。

要するに、僕のは、移り氣な蒐集だから、とても物にならない。

物にならぬとは知りつゝも蒐め始めると二三年は馬鹿に熱心である。

さて次は何の蒐集を始めるかな？

（一一・一〇・一七稿）

樂燒

此の家の隣りに、歸山と號する、燒物師が住んでゐる。

元は相當手廣くやつてゐたさうだが、今はほんの道樂半分の仕事らしい。

今夏、進めらるゝまゝに樂燒をやつて見る氣になつた。粘土と篦を貰つて來て、早速作り始めた。

小學校以來、粘土細工など、殆どやつた事の無い僕には、うまく出來やう筈がない。

妙に歪んだ皿や、いやに厚つぼつたい一輪差や、字が右左になつた印判が出來たりした。

やがてそんな物が十も溜つたので、燒いてもらふ事にした。

先方に見せたら、案外にも、斯んなのが面白くていゝと云ふのである。素人が、法則も何も無視して、捻り上げ、揑上げたものゝ方が却つて自然でいゝ味のものが出來ると云ふのである。

約一ヶ月もして、素燒が出來て來た。其れに繪や句を書いて、もう一度燒くと、愈々出來上る譯である。

一寸面白いので、百合子にも多美子にも進めて作らせた。妹等のは流石に女らしい細々したものが出來た。

いゝ氣になつて、どん〳〵作つては燒かせてゐたら、どえらい高いものについてしまつた。懲り〳〵して、其れ以來、いくら賞められても、もう手を出さない。

今日も隣の窯からは、濛々と、黑煙が、立ち上つてゐる。

（一一・一〇・二四稿）

ある男

昭和七年七月、南紀地方を、旅行した事があつた。其の時、勝浦には、約二十日滞在した。

勝浦に「越の湯」と云ふ旅館がある。其の旅館に宿つてゐて、毎日釣等して呑氣に過した。

元來、紀州が暑い處であり、其れに滞在中が眞夏の候であつた上に、此の宿と云ふのが、海に突き出た頗る暑い家であつた。

朝から部屋中一ぱいに陽が差し込み、其れに海の照り返しで、とても居られたものではない。

そこで、朝早くから、船に乘つて、海へ避難（？）するのである。斯ふでもしなければ實際やり切れないのであつた。

そして、釣等して、夕方涼しくなつた頃、宿へ歸つて來ると云ふ生活を二十日も續けたのである。

此の釣船の――と云つても、モーターボートだが――運轉手否船頭が、此の話の主人公である。

色の眞黑い、十二貫そこ〳〵の痩男だが、とても愉快な人物である。

初めて此の男を知つたのは、來て間も無い時、過つて雨戸を海の中へ落してしまつた事があつた。

其の時、一人の男が、シャツのまゝ、ざんぶとばかり海の中へ飛び込んで、戸を取つて來てくれた。其れが誠に何の躊躇もなく極く、自然に、又極めてスピーディーに行はれたのであつた。見てゐる方があきれた位であつた。が本人は一向すましたものであつた。

其れ以來、此の男を、面白いと思ひ始めたのである。

釣の時は僕等は長府から持參した釣道具で釣つたが、此の男は勝浦の道具で釣つた。最初は僕等との競爭をやる氣らしかつたが、幾らやつても及ばないと知ると、あつさり兜を拔いで、長府式に宗旨變へしてしまつた。

斯んな所が此の男の可愛いゝところである。

又よく勝浦節とか串本節とかを得意になつて唄つたりした。斯んな時は、何時も向ふ鉢卷なのである。

痩せてはゐるが、大變な元氣で、之れでも私は兵隊に行つてゐましたと云つて、軍隊生活を語つたりした。

其の軍隊生活たるや、實に珍談奇談に富むものであつて、とても金語樓の話家の兵隊どころでは無い。腹を抱へて笑はされたものである。

其の內の二三を云つて見やう。

ある時、何かの過ちをやつた罰として、上官の寢台の下で、一晩中、寢台を

支へてゐた事があるさうである。初めはよかつたが、次第に手は痺れて來るし、小便には行き度くなるし、泣きながら共れでもどうやら一晩辛抱したと云ふのである。少しでも手をゆるめると、今まですや〳〵と寢てゐた上官が目を覺ましてどなるのださうである。實に以つて、地獄の責苦であつたと云つてゐた。

又或時は、つく〳〵軍隊生活が嫌になつて、兵營内にある古井戸に飛び込んで死んでしまはうと、夜窃にベットを拔け出して、井戸の周りを徘徊してゐるところを幸か不幸か又ぞろ其の上官に發見されて、より以上の責苦をされたさうである。斯ふなると寧ろ悲劇である。

併し、人間は、どゝの詰りまで行くと、飜然として、悟るところのあるものらしい。此の男も、こゝまで來て、初めて心氣一轉、今の様な快活な男となり、立派に模範兵として、軍隊生活を終つたのださうである。

又夜は、宿の石垣のところに寄つて來る夥しい小魚を釣つたりした。

之れを見てゐた此の男が、網を何處からか借りて來た。そして、一度に全部捕つてしまうと云ひ出した。どんな事をするかと見てゐると、ランプを石垣のところに灯して、之れに寄つて來る魚を、舟から網を卸し、次第に引絞つて來て取つてしまうのである。いや、とれるのなんの、バケツに何杯と云ふ大漁である。宿のお客は、總出で、之を見て、喜んだものだ。

愈々別れの日になつて、舟まで見送りに來た此の男は、僕が握手してやると、涙をぽろ〳〵こぼしてゐた。

其の後、此の男から來た手紙に依ると、僕から貰つたお禮の金で、背廣服を生れて初めて一着新調に及んだと云ふのである。そして「今度大將が來た時には、此の洋服を着て、お迎へしますノシ。」と書いてあつた。

（註）ノシとは、此の地方の語尾につける放言である。

（一一・一一・一稿）

雪　達　磨

俗に「雪は豊年の兆」と云ふ事があるが、今年は正しく、其の諺が、適中してゐる。

今、試みに、日記を繰つて見ると、二月四日の節分の日に降り始めた雪は、翌五日には一尺二寸の深さに積つて、新聞では四十年振りの何のと言つて騒いだ。

次に二月二十三日には、更に一尺三寸と云ふ積雪であつた。

二三日おいて、二十六日即ち二・二六事件突發の日も雪であつた。續いて二十八日も亦雪と云ふ具合に、全く二月と云ふ月は、雪々々の連續だつた。其れで終つたのかと思つてゐたら、三月八日に亦雪が降ると云ふ有様だつた。

二月五日には、庭の雪除けをさせたが、雪も一尺以上になると、仲々除雪に

骨が折れる。そこで、雪の玉を轉がして行つて、其れが次第に大きくなると同時に雪が除けられると云ふ方法をとつた。之れなら男一人でも割に樂に除雪が出來る。

斯ふして出來た雪の玉が遂に十ばかりも庭の隅に轉がつた。斯ふして轉がして置くのも惜しいので、之れに頭をつけて、雪達磨として見た。

第二回の積雪の時には、初から、計畫的に、大きな雪達磨を作つた。其れは高さ一丈餘に及ぶすばらしいものであつた。來島君が梯子を持て來て、顏の造作等やつた。

目玉のタドンは、次の日にはもう拔けて落ちた。

雪達磨と云へば中學時代を思ひ出す。

或年の冬だつた。校門の前に、大きな雪達磨ならざる雪のサイダー瓶を作つたのである。御丁寧にも、瓶には、三ツ矢サイダーと明記された。當時の校長

のニックネームが、三ツ矢サイダーであつたのである。

斯んなに雪の多かつた今年は、夏が暑かつた。お蔭でお米は大豊作である。

先日御發表になつた明年の勅題が「田家の雪」と云ふのである。又畏き極みである。

（一一・一〇・二一稿）

幽靈を見なかつた男

もうかれこれ一昔にもなつて、そろ〳〵時效にかゝる頃だから、一切を白狀する事にする。

話と云ふのは、僕が山口に居た時の事である。

大殿小路の宿から新築した天華の家へ移轉して間も無い頃であつた。

或る夜――確か十二時少し前と記憶してゐるが――餘りの胸苦しさに夢を破られた。

直觀的に何ものかに襲はれてゐるなと意識すると同時に、全身に冷水を浴びた樣に感じた。

胸元を押し附ける力は次第に加はつて來る。

ジリ、ジリ、ジリ、と締めつけて來る。

驚くべき力だ。

どうにかして此の恐るべき力から逃れやうと、有らん限りの努力をして見たが、大岩の下敷になつた様に、びくともしない。聲を立てやうにも掠れ聲さへ出ない。ものゝ四五分も此の苦闘は續けられた。其の間、幾度か目を開けて、胸の上の或るものゝ正體を見やうと思つたが――事實を告白すると――どうしても見る勇氣は出なかつた。と云ふのは、其處には、必ず髪をおどろに振り亂し、血汐の滴る生白い顔が、二寸と離れない所に履ひかぶさつてゐるに違ひない。さうすれば、それだけ此の僕の恐怖を増し、此の不可思議力との抗爭を不利にし、完全に或るものゝ力に屈服せねばならぬと思つたからでもある。兎に角、目は一度も開かなかつた。

其の内に益々闇の力は其の猛威を逞しうして、殆ど意識が朦朧(もうろう)となるまでになつて來た。

人力が到底不可思議力に抗し得ないと知つた時、人は誰でも神佛に縋(すが)る。僕も其の例に漏れず、苦しい息の下で、斯んな場合一番御利益のありさうな不動明王の御眞言を心の内で唱へ始めた。すると五分間も經つた頃から次第にすうつと輕くなる自分の胸を感じた。其れに力を得て、一生懸命唱へてゐると、見る〳〵胸苦しさは樂になつて來た。斯くして、數分の後には、すつかり常態に復してしまつた。

そこで漸く目を細目に開けて見たが、其處には電燈を消した深い〳〵闇が横たはつてゐるばかりであつた。其れからうつら〳〵と寢込んでしまつたが、もう朝まで何にも無かつた。

其の翌晩である。

又もや昨夜と同時刻、例の魔の手は、僕を襲つた。之れと爭鬪するの無駄を知つた僕は、今度は、始めから不動明王の眞言を唱へた。

其の爲か、今度は左程努力無くして、魔の手を驅逐する事に成功した。

話と云ふのは、以上の如きものである。

僕の部屋は、二階であつたが、百合子も同居して居たので、山口に居る間は、一切此の事は、家人に言はなかつた。

新築した地所は、何でも古い武士の屋敷跡とかで、山に面した、じめ〳〵した所であつた。

僕も昭和の人間である。之れを以つて直ちに幽靈であるのとは斷じ度くは無い。

一時の生理的現象乃至心理的現象として葬り去り度いのである。

併し、事實は餘りにも不可思議であつた。

今にして思ふても、まざ〳〵と當時の幻影が浮ぶ。其れ程僕の腦裡に深く刻まれてゐる恐怖である。

（一一・一〇・二三稿）

芋掘

此の屋敷の東側に、少しばかりの空地がある。そこを畑にして、大根や菜を作つてゐる。下肥をやらぬのだから、どうせろくなものは出來ない。皆營養不良の野菜ばかりである。併し、其の季節〳〵のものが、常に、何かしら出來てゐると云ふ事は、好もしい事だ。

豆の時季には、豆をちぎる、茄子の時節には、茄子がちぎれる。又樂しみなものではある。

今日の神嘗祭には、薩摩芋を掘つて見る事にした。

舛谷君と來島君のところの小さい子供を呼んで掘らせる。

掘つて見ると、これはしたり、千成瓢簞の樣にがら〳〵したものや、山の芋の樣に細長くて、ひげだらけのものばかりで、聊か失望せざるを得ない。たまに

太いのがあれば、芽が出てゐたりする。これでは子供のお土産にもなりさうにない。之れが又食べて見て旨いのなら兎に角、とても水つぽくて食はれたものではなからう。

併し、案外斯んなのが旨いのかも知れぬ。何は兎もあれ、少しづゝ、分けてやる事にしやう。

（一一・一〇・一七稿）

音樂を聽く

僕は音樂が好きである。

好きと云つても、自分では、殆ど何もやらない。やらうにも「オタマジャクシ」も知らぬのだから、手が出ない。只、人のやる音樂を聽くのが好きなのである。

嬉しきにつけ、悲しきにつけ、苦しきにつけ、音樂は、僕の好侶伴(りょはん)である。

就中、音樂好き故に、病氣等の場合、どんなに慰さめられたか知れない僕である。

音樂を聽くと云つても、僕のは、音樂會等に出かけて行く事は極く稀である。

クライスラーのヴァイオリンを聽いた外、百合子の演奏會に、引張られて行く位のものである。

僕のは、主として、ラヂオと、レコードに依る、音樂觀賞を出でないもので

ある。

レコードは、小さい時から好きであつて、中學一二年頃から、あれこれと、物色し始めた。最初は、極く解り易い、聲樂物とか、器樂の獨奏物とかを集めた。聲樂では、カルーソー、マコマック、等を、器樂では、主として、ヴァイオリンのエルマン、ハイフェッツ、ジンバリスト、クライスラー等を夢中になつて聽いたものである。中學時代は、凡そ斯んな事で、過ぎてしまつた。

大正の終りから、昭和にかけて、蓄音機界に、一大變革が齎(もたら)された。

第一は、レコードの電氣吹込みであり、第二は、エレクトラの出現であつた。

今までの機械的低音から、肉聲的高音へと一轉した。

山口時代には、重奏物、特にカルテットを好む樣になつて來た。レナーやカペーのストリングカルテットを盛んに聽いた。

最近に至つては、カルテット熱も稍々覺めかけて、オーケストラ物へと移つ

て來た。

以上の推移は、大體、萬人が辿るところの極順調な發達と稱すべきである。

僕は元來、西洋物でもジャズや映畫主題歌と云つた樣な流行歌は、少しも良いとは思はない。否、寧ろ、卑俗低級なジャズや流行歌を聽くと、反感をさへ抱くのである。

又、近來の新しい音樂、卽ち近代音樂と稱するものも、さつぱり解し得ない。近頃の多くのさうした作品は、只いたづらに、我々の神經を刺戟し、興奮させるばかりで、僕は嫌ひである。

矢張り、音樂は、人は何と云はうと、古いものに限る。

ハイドン、ベートーベン、シューベルト等々の音樂が、人の心を慰め得る本當のいゝ音樂だと僕は思ふ。

僕の所有してゐるレコードを、作曲者別に分類するならば、恐らく、ベート

ーベン物が斷然他を壓してゐやう。ベートーベン物では、シンホニーに次いで多いのは、ピアノ・コンチェルトで、シュナーベルの其れは、正に天下一品である。

然し、今でも、器樂では、セロ、歌では、マコマック物は、依然好きである。セロの好きな譯は、嘗(かつ)て、自分で、少々いぢつて見たからである。

マコマックの歌は、其のポピュラーの所と、何とも云へぬ柔い聲が好きである。マコマック物は、外國まで注文して、殆ど全部集めてゐる。

レコードの蒐集家は、或は特定の作曲家の物を集めたり、或は珍品の蒐集をやつたり、色々異つたコレクションをする樣であるが、僕のはマコマック物と、パーフェクトデー (A perfect day) の蒐集である。マコマックは前に述べたが、パーフェクトデーとは、僕の好きな歌の一つである。末だ邦譯された歌詩は見當らないが、奈倉先生の意譯があるから、左に掲げて見やう。

思ひ足りたる一日

（一）

思ひ足りたる一日の終り
心静かに物思ふとき
清く爽けき寺々の鐘
ありし此の日の歡びを告ぐ
思ひ足りたる一日の終り
疲れし心にそは何語る
陽は赤々と燃えつゝ沈み
親しき友も別れ行く時

（二）

思ひ足りたる一日の終り
まして旅路も終りに近く
胸に名殘の思ひは深く
願は堅く頼もしゝ
思ひ足りたる此の日をいかで
記憶の色の褪すに任せん
思ひ足りたる一と日の寶
結びて得たる友垣ぞこれ

（拙著「はらから」より）

近來、レコードは、多少、行き詰つた様である。毎月出る新譜に、一つとして、之れはと思ふ様なものは無い。何れもずつと以前に出したものゝ再現であつたり、卑俗なジャズや流行歌でしかないのである。

我々レコードファンとして、實に淋しい限りである。

又ラヂオは近年益々發達して來て、雜音も殆んど無くなり、我々に良き音樂を聽かせてくれる事は、實に有難い。昨年から、今年にかけてだけでも、十指に餘る名演奏を放送してくれた。

曰くピアチゴルスキー、曰くフォイヤーマン、曰くマレシャル、曰くライボー、曰くジンバリスト、曰く、、、、

最後に、僕の舊作に、エレクトラと云ふ詩があるから、此處に載せて置く。

エレクトラ

今日の日もいつしか暮れて行く、、、、
笑みも、樂しみも、喜びもないうつろな日が
苦しさと悲しさと淋しさを殘して
昨日もさうだつた、恐らく明日も
永い病の床の中――
けれどこんなに暗い心細い日を
慰めてくれるものがたつた一つある
其れは枕邊のエレクトラだ
朝に眞晝にそして夕べに
其の妙なる調の前には
苦しさも、悲しさも、淋しさも、消え失せて
何かしらほゝえみがこみ上げて來る
何かしら樂しさが湧き上つて來る
何かしら喜びに充たされる僕である。

（拙著「はらから」より）

（一一・一〇・二九稿）

左青の俳畫

去年の夏の初めの頃「俳畫の描き方」と云ふ本を買つて讀んで見た。五十頁ばかりの小さな本だが、仲々要領よく書かれてあつて、一氣呵成に讀んでしまつた。其の著者が左青其の人であつたのだ。中に數葉の俳畫が挿入されてゐる。其れ等の何れもが瓢逸と云はふか、洒脫と云はふか、兎に角左青一流の俳味たつぷりのものである。又句讃がしてある。其の字が誠に以つて又俳味のある良い字だ。卷頭に「牧場もとゝなふや雁の渡る頃」と云ふ句に、老僧が庭を掃いてゐる圖が書かれてゐるのがあつた。

今年の八月、ふと左青さんに、短冊を書いて貰ひ度くなつたので、舛谷君を新井宿のお宅の方へやつてお願ひした。

五十恪好の人で、舛谷君をつかまへて、色々と話がはづんだ樣である。話に依ると、奥さんは亡くなられて、今中學に行つてゐる息子さんと、只二人の鰥暮しと云ふ事であつた。同氏は外語の佛語科出身と云ふ變り種である。俳句もやれば、俳畫もやる、又印刻もやれば、木版もやると云つた調子に、極めて多趣味の人らしい。家の中は、其れ等の加工品や細工物で、處狹きばかりださうだ。

最後に持ち出して來たのは、一幅の軸物であつた。此れを讓つてもよいと云ふのである。

但し、秘藏の品だから、他人には絕對に讓り渡してくれぬ樣にとの事であつた。舛谷君が持ち歸つたのを開けて見ると、之れが何と、先に述べた「雁渡る」の畫であつた。

本の卷頭に載せる位のものだから、餘程自信のある作と見えるが、よくも僕の樣な一面識も無い者に、讓つてくれたものと、不思議に思つてゐる。

勿論、貝島と云ふ名を出した譯では無い。山下春光としての僕である。

（一一・一〇・一六稿）

成層圏飛行

最近「將來の航空路は成層圏（Stratosphere）にあり。」と云ふ言葉を屢耳にする。

玆に所謂成層圏（Stratosphere）とは、何を云ふのであらうか。

一言にして云へば、大氣の上層を名づけて、斯く呼ぶのである。卽ち、我々の棲息してゐる對流圏（Troposphere）の上層に位する、地表上約十一粁以上の高空を云ひ、其の層は約三十粁にも及ぶものである。

成層圏とは、如何なる所であらうか。

第一に其處は、對流圏とは異り、氣象上の變化の無い所である。雲も湧かねば、雨も無い、雷も無ければ、突風も無い極めて安靜な場所で、只其處には、一定の方向に、微風があるのみである。

次は酸素が非常に少い所である。

又其處は攝氏零下五十五度と云ふ極寒である。併し、此の溫度は、殆ど一定しておつて、寧ろ上昇するに從つて、少しづゝ高くなると云はれてゐる。

先づ大略以上見た如き狀態の場所と思へば、大した過ちは無い。

右の如き研究は、或は各種の測定器を乘せた氣球を放ち、或は人の乘つた氣球に依り、觀測せられたものである。

然らば、何故飛行機の航路として、此の成層圏が適してゐるかと云へば、次の如き理由に依るものである。

其の一は、前に見た氣象上の變化の無いと云ふ事である。飛行機の恐れる雷雨も無ければ、突風も無く、實に安定した所であるからである。

次に飛行機の速力が、うんと增す事である。

元來飛行機の速度は、其の抵抗が少くなれば少なくなる程增大するものであ

る。今假りに、抵抗が五分の一となれば、理論上は速度は五倍になる筈である。

然るに成層圏に於ては、前述の如く、非常に大氣が稀薄だから、五倍にはならずとも、二倍とか、三倍とか、其の速度を增し得る事は確實である。

ところが、玆に、困つた事は、酸素が少なくなると、飛行機の發動機の馬力が、低下する事である。併し、此の馬力の低下を防ぐには、過給器（スーパーチャージャー）を附ける事に依つて解決される。

酸素の缺乏は、獨り發動機に影響するばかりでなく、人間が其の爲呼吸困難等を起すから、之れに對する設備を施さねばならぬ事は勿論だ。其の他寒さを防ぐ保護裝置も發動機と人間の兩方になされねばならない。

併し、之れ等の問題も着々と解決されつゝあるから、近き將來に於て、成層圏飛行も必ず實現される時が來やう。

ロケットの發達した曉には、速力の如きも、一秒六百米乃至七百米卽ち一時間

二千粁と云ふ超スピードを以つて天空を矢の如く飛行する様になるであらう。そして月へは二百時間卽ち八日位で行く事が出來る様になるであらう事も強ち夢物語りでもあるまい。

若し吾々が、三十年前に、東海道を僅々二三時間で飛行する事が出來る等言はふものなら、狂人扱ひにされたに違ひない。又誰が二十年前に、居ながらにして、ベルリンの放送が、聞けると豫言し得たであらうか。

吾人は再び云ふ「將來の航空路は成層圏にあり。」と。

（註）以上の詳細は拙著「明日の飛行機」六七頁――七八頁參照。

（一一・一〇・二二稿）

猫とクローバー

ダーヴィンは言つてゐる。「彼のクローバーが受精して種子を結び得るのは、卽ち蜜蜂の媒介に依るものである。然るに、蜜蜂は、野鼠に其貯へて居る蜜を奪はれ、その子供を保育する所の巣を荒されて、散々繁殖を妨害されるものである。ところが、この花蜂の大敵である野鼠には、又飼猫といふ大敵があつて、常にその繁殖を掣肘されてゐる。それ故、クローバーは、飼猫のゐる人里に最もよく繁茂する事が出來る。」と。

吾人は、苟も動植物の成長する所には、極めて微妙な關係網線が存在して居る事を認める。卽ち、彼等は、互に相賴り、相賴られ、互に相制し、相制せられつゝ行くところに、生物界の均衡が保たれる。と同様に吾々人間界にも、この一貫した法則の行はるゝ事は否定されない。

換言すれば、社界組織もこうしたもたれ、合ひの形で進化し行くものと云はざるを得ない。

これを自然界の均衡と云ふ。

（舊　稿）

かる

「かる」とは、鴨の一種であつて、大きさは、眞鴨位で、一般の鴨が冬北方より來つて、再び春に歸るのに、此の種ばかりは、我國に四時止つてゐて、夏季に繁殖するので、夏鴨とも呼ばれる。

話と云ふのは今年の八月三日だつた。或る人から「かり」（雁？）の子だと云つて、四羽生れて間も無い雛を貰つた。一見、家鴨の子の樣だが、其の形や動作には、大分家鴨の子とは違つたものがあつた。さうかと云つて、雁の子とはちと頷ずけない。今から思へば「雁り」と「かる」の間違ひだつたのだ。兎に角、飼つて見る事にした。

僕は以前に家鴨の子を飼つた經驗があるので、其の樣にして飼つて見る事に

した。ところが、二三日して、一羽が死んだ。續いて又一羽死んでしまつた。

そこで、鳥に詳しい山下君に尋ねて餌を變へたりした。其の結果、殘つた二羽はどうやら元氣になつて來た。

主として稗の様なものを擂潰したものを食はせたが、蠅や蝮蜥などの虫類を特に好んで食つた。手から直き〳〵其れ等のものを食ふ程にまで人に馴れて來た。斯ふなると實に可愛いものだ。

斯ふして飼つてゐる間に、段々大きくなつて來た。ところが、一羽の方がどうした事か右脚を痛めてビッコを引く様になつた。果ては歩行さへ出來なくなつてしまつた。そこで調べて見ると、關節の脱臼とわかつた。手で嵌めれば直ぐ嵌まるのだが又直ぐ元に戻る。そこで、嵌めて置いて、此れにボール紙を當てゝ、其の上から絆創膏で固く卷いてやつた。斯ふしておけばどうやら嵌つてゐる。

時々絆創膏を卷き直してやつてゐる間に、約二十日もすると立派に治つてしまつた。

やれ〳〵と思つてゐると、もう一羽の方が、今度は、食慾が少しも無くなつた。首を縮めてしまつて、餌には見向きもしない。そして、すつかり元氣が無くなつてしまつた。

色々やつて見るが少しも治らない。とう〳〵上野の動物園まで持たせてやつて、園長さんの診察を受けた。其の結果、偏食に依る石灰分の缺乏と解つた。偏食の恐ろしさを何んだか見せつけられてゐる様に思はれてならなかつた。

早速貝殼を粉にしたものや肝油等を餌にまぜて食はせて見た。旬日ならずして其の効果は現れて來た。そして、約一ヶ月經つた今日では、立派な躰になつてゐる。翼も殆んど延び揃つて、二羽仲よく遊んでゐる。

併し、未だ其の雌雄は、一向に解らない。

（一一・一〇・一六稿）

一升桝は一升桝

昭和四年の夏、箱根の強羅に、暫く滯在してゐた。僕等の宿から、數丁と離れない所に、瓜生大將の別莊がある。大將は、此處で、一夏を、自適されるのである。

近くだつたので、時々遊びに行つた。大將は、もう七十を幾つか越へられた御老體の上、御病氣の爲、御不自由な御身體だが、仲々の御元氣だつた。僕等でさへ息のはづむ樣な急坂を、樂々と上られたりした。

共の頃僕は生氣をしてゐたので、大將に生氣按摩などしながら、四方山のお話をうかゞう事が出來た。大將の青年時代、留學時代、日本海々戰當時の事など、お話は仲々盡きない。

大將は云はれた。

「どうも近頃の人は、一升桝に一升二三合も詰める樣な事をしたがるが、あれはよろしくない。一升桝には一升より入らぬものよ。」

語は簡なりと謂へ共、實に至言である。

以つて我々の處世訓となすべきである。

東郷元帥薨去の折、御不自由な身を東京に運ばれ、元帥邸を弔問されてゐるところの寫眞が、新聞に大きく出た事があつたが、末だに其れが目に殘つてゐる。

畏くも、昨年、大將へは鳩杖の御下賜があつたと聞く。

遙かに大將の御健康を祈りつゝ擱筆する。

（一一・一〇・二五稿）

蠅取週間

近年、衛生思想の普及と共に、蠅取週間の催が、大分盛んに成つて來た。誠に結構な事である。

我家庭に於ては、昭和五年より、毎年、家庭總動員で、之れを行つて來てゐる。もう、今年で、七年繼續した譯である。

我家の蠅取週間は、一般の其れとは、多少趣を異にしてゐる。と云ふのは、第一が、之れを始める時季が、一般のものにあつては、眞夏（七・八月）多く行はれるのに反して、我家の其れは、春の四月にもう始めるのである。

第二は、其の期間の長い事だ。

一般のものは、長くて一週間、普通、只一日を以つて、其の期間と、定めてゐる。即ち「蠅取週間」とか「蠅取デー」とか呼ばれてゐるのは、其の爲である。然るに、我家の其れは、四月から、其の年の十一月まで、之れを繼續するのである。卽ち、謂はば「蠅取週間」の連續に他ならない。一年の大半が「蠅取週間」なのである。

第三は、蠅ばかりでなく、凡そ害虫と名のつく虫は、總べて、此の期間に於て、驅除する事である。

一般のは、其の名の示す如く「蠅」のみであるが、我家では、其の他「蚊」も取れば、「蛾」も取る、或は進んで、「毒蛇」にまで及ぶのだ。

第一の始める時季を四月にした譯は、蠅は冬籠してゐた雌が、四月頃、產卵し、之れが孵化成長して、所謂「蠅」の出始める時季だからである。此の時の一匹は、夏の千匹に勝る。何事に依らず、最初が大切である。火事はボヤの中

に消さねばならぬ。

第二の長期間に渉つて行ふ譯は、一言にして云へば、其の徹底を期する事に他ならない。

夏一週間や十日やつて、其れで事終れりとする如きは、誠に以つて、淺薄なやり方であると云はねばならぬ。そんな事で、蠅の撲滅は、思ひもよらぬ事だ。

少くとも、一ヶ月とか、二ヶ月とか、纒つた期間之れを施行してこそ、其の効果も現れると云ふものだ。何事も徹底せねばやらぬ方がましだ。

以上の如き約束のもとに、毎年熱心に實行して來た。

其の成績は、一々統計表が作成せられて、一目瞭然解る樣にしてゐる。（詳細は拙著「蠅取週間に就て」參照）今其の總合計數を年度別に見ると、次の樣になつてゐる。

昭和五年	同六年	同七年	同八年	同九年
三九、五九六	六一、〇〇九	六八、三一四	七六、〇四〇	七三、二三〇

又右五ヶ年の統計上、左の如き事實を知つたのである。即ち、蠅は春の終りから夏の初めにかけて最も多く、眞夏には少くなり、秋に再び多くなると云ふ事である。

之れは、明かに、多くの人が、蠅と云へば、眞夏が一番多い樣に思つてゐる事の誤りを指摘してゐるものである。

此の點から云つても、眞夏蠅取週間を行ふ事の愚かさを知るであらう。

以上の如く、家庭總動員で、長期間、毎年繼續的に行つた結果は、非常に蠅が少くなつた事は勿論である。

蠅取週間に當つては、奬勵の爲、時々、懸賞をかけたりしてゐる。

懸賞に就て面白い話がある。まだ蠅取を始めて間も無い頃の賞品は、蠅一疋何厘、蚊一疋何厘と云つた具合に、一々之れに價格を附してゐた。

ところが、初めは取り方も少かつたので、其れで大した不都合は起らなかつたが、次第に多く取る樣になつて來ると、莫大な額に上つて、とてもやり切れなくなつた。何しろ、一人で、一週間に、五圓もの金額になつた事もあつた位である。これでは、月給より、蠅取賞金の方が高くなると云ふとんでもない結果になつて、驚いて、其の方法は、中止してしまつた樣な事もあつた。

又日用品を賞品にして見た事もある。例へばタオルとか、石鹼とか、足袋とか、クリームとか云つたものを。ところが、タオルや石鹼は先づ無難だつたが、足袋に至つては、實に弱つた。何しろ、女中の一人〳〵の文數(もんすう)までを其の爲調査しておかねばならず、其の手數だけでも大變である。又クリームではこり〳〵した。と云ふのは、或クリームを貰つた一人の女中が、せつせと之れをつけてゐたら、顏に合はなかつたものと見えて、カブレが出來て、ひどく賞品係、恐縮した事などあつた。之れなど笑へない挿話だ。

又半襟をやつた時があつたが、こんなものは第一、年齡に依り異るものであり、又流行があつたり、好き好(この)みがあつたりして、仲々面倒なものだ。今はこんなのは一切止めて、タオルや石鹼の樣な、万人向きのするものばかり與へてゐる。勝手が解るまでは、何事にも相當な失敗や苦い經驗はあるものだと思つた。

今年の四月からは、今度は、炭坑が、之れに習つて始めた。

先づ五つの小學校が主體となつて、長期蠅取を實行してゐる。

之れは、當方より、進めたのでもなければ、强制したのでも無い。自發的に僕の著書に刺戟されて始めたのだ。

炭坑の方は、人數が多い上に蠅も居ると見えて、七月の如きは、大之浦三校のみにて、百五十五萬疋以上の蠅を取つてゐる。

そして、最近の報告に依ると、大へん蠅が少くなつて、其のお蔭で、今年の夏は、傳染病患者が殆んど無かつたと云つて喜んで來てゐる。誠に結構な事だ。各小學校の校長始め諸先生方も非常に熱心であり、數千の生徒もよく其の意味を解して、實に涙ぐましいまでの活動をしてくれてゐる。小さな蠅取の戰士達は、手に〳〵蠅叩、ピンセット（これで蠅を挾むのだ）マッチ箱（これに蠅を入れるのだ）等の武器を持つて、家の中は勿論、塵捨場と云はず、食料品店の店先と云はず、遠征に出かけるのである。

今では炭坑には少くなつて、近くの村や町まで、此れ等の小勇士は、大遠征を試みる事もあるさうだ。考へてもホヽ、笑ましい狀景ではないか！　之れに刺戟された各家庭でも、蠅取には、仲々眞劍になつて來た。

之れが二年三年と繼續されるに及んでは、必ずや炭坑から蠅を驅逐し去る事も敢へて不可能な事ではあるまい。

そして、其の時こそ、眞に住みよい炭坑樂土を現出する譯である。

斯ふ考へて來ると、我家での過去七ケ年の努力は、漸く茲に實を結び、社會的意義を有するに至つた事を喜びつゝ擱筆する。

終りに舛谷君、來島君、市來君の助力を衷心より感謝するものである。

（一一・一〇・一八稿）

天井の怪

麻布の家で、寢込んでゐた時の事である。

僕の寢てゐた一室の天井に起つた怪談である。

其れまでも、二三度、天井に當つて、變な物音を、聞いた事があつた。

古い家だから、猫か貂でも居るのだらうと、餘り氣にも留めなかつた。

其れから間も無い、或る夏の夜の出來事である。

つら〳〵と寢込んだ頃、異樣な物音に、夢を破られた。

音はやはり天井に當つて聞えるのである。「ミシリ〳〵」と云ふ無氣味な音である。

蚊帳越しに天井を窺ふと「ミシリ〳〵」と云ふ度に、中央から下つてゐる電燈が、可成大きく搖れてゐるのが見える。

直感的に、天井裏を、何物かゞ、歩いて居ると思つた。

音から推察すると、猫や貂の樣な、そんな小さい物では無い。動物だとすると、もつと〳〵大きいものである。

其の震動に依つて、電燈が搖れてゐる位だから、相當なものに違ひない。僕は尙も天井の怪音と電燈に全身の神經を集注してゐた。

「ミシリ〳〵」と云ふ怪音は依然として、僕の眞上でしてゐる。、、、、、

暫くすると、稍々遠ざかつたと見えて、音は低く、次第に幽になつて來た。

と、同時に、電燈の搖れも、次第におさまつて來た。

ベルを引くと、ッルが飛んで來た。

僕は、其の事を、小聲で話して、舛谷君に知らせにやつた。

舛谷君は、天井に這入つて見やうと云ひ出した。併し、若し泥棒でゝもあつて、怪我等をさせられては、其れこそ、馬鹿を見るからと云ふので、其れは止めさ

せた。其の内に天井の音も全く止んで、シーンと靜まりかへつた。

無氣味な沈默である。

暫くは、三人で、色々と、評定をやつて見たが、結局、明朝になつて、調べる事にした。

ふと、ツルが氣が附いたのは、電燈の位置が變つてゐる事であつた。云はれて見て、僕もやつと氣が附いた。

と云ふのは、僕の部屋では、眞上に電燈があるのは、寢てゐると、目の爲に惡いので、常に室の一角の柱の處へコードを長くして引張りつけてゐたのだつた。

其れが今は僕の頭上にちやんとぶら下つてゐるのである。

正しく其の位置が變つてゐる。

之れはくゝり附けてゐた紐が、自然に切れて、元の位置に歸へつたのである。

之れで怪音の正體はつきとめた事になる。

「ブッッ」と切れたと同時に反動で大きく電燈が搖れ、其の爲ソケットから其の震動が天井に傳はつて、恰も天井が「ミシリ〳〵」となつたかの樣に思はれたのである。

最初、僕は此の原因と結果を逆に考へた爲、右の如きナンセンスも生れたのであつた。

斯ふ話して來ると、僕の輕卒さ加減を笑ふだらうが、あの場合としては——其れ以前變な猫とも貂ともつかない怪しい音を天井に聞いて、其れが未だ解決されずにゐた矢先でもあるし——特に咄差の場合、電燈の綱が切れてゐやう等とは、考へ及ぶものでは無い、後から見れば、馬鹿〳〵しい笑ひ話だが、其の時の本人にとつては、立派な怪談である。

怪談と云ふ樣なものは、大方斯ふしたものであらう。（一一・一〇・三一稿）

御仁愛

明治神宮外苑に建設中の聖德記念繪畫館は、漸く此の程完成した。

昭和八年、私が拜觀した時分には、未だ、全部の繪畫が、出揃つてはゐなかつた。

けれども、現代一流の大家が、心血を注いで、謹寫し奉つた一生一代の力作揃の事とて、何れも見事なものばかりであつた。

併し、私の心を、一番强く打つたのは「岩倉邸行幸」の一面であつた。

拜觀してゐる中に、知らず〳〵目頭が熱くなつて來て、有難涙が止めどもなく流れ落ちて仕方がなかつた。暫くは釘附けにでもなつた樣に、其の壁畫の前を去り得なかつた。私一人かと思ふと、さうでない。總べての拜觀者の誰もが、此處に長く足を止め、感泣し奉つてゐるのである。

明治十六年七月五日、右大臣岩倉具視公、病愈々篤しと聞し召した陛下は、急に御見舞の爲、岩倉邸に行幸遊ばされたのである。

然るに、同月十九日、公愈々危篤の趣が天聽に達するや、天皇には、一段と御軫念あらせられ、再度の御親問を遊ばされたのであつた。

俄の事でもあり、殊に危篤の病體なので、公は、衣服を改める事も出來ず、寢具の上の膝のあたりに、袴を掛けて、禮裝に代へ、拜謁致されたのであつた。

陛下は、南側に立御遊ばされ

「どうであるか」

と仰せ給ふて、ぢつと公を御見つめ遊ばされたのである。此の時、公は、衰弱甚だしく、起居の自由を失つて居たので、槇子、增子の兩夫人が、手を添へて、僅かに陛下の方へ向け、公は辛うじて、頭をもたげ

「陛下の萬歲を祈り奉る」

と奏上しただけで、もはや敬禮する氣力さへなく、只兩手を合せ、涙を流して、陛下を伏し拜まれたのであつた。

「君臣相對して、復た他語なし。」と、岩倉公實記に記されてゐる一語を以つて、此の御模様を拜察し得るのである。（北蓮藏謹話に依る。）

其の時の御模様を謹寫し奉つたのが、右の壁畫である。

もとより此の繪の筆者の全身全靈を傾注し謹寫し奉つた結果が斯かる千古の名作を描き得たものであらうが、我々は其の御模様を拜して、陛下の山よりも高く、海よりも深き御聖恩に思ひを致す時、涙なくしては、拜し得ないのである。

もう一度、是非、東京に居る中に、拜觀致し度きものと念願してゐる。

（一一・一〇・二五稿）

地震・雷・火事・〇〇

「地震・雷・火事・〇〇」と云ふところを見ると、恐怖の筆頭は、地震であるらしい。地震から火事も起る事だし、或はさうかも知れない。

併し、僕は、幸か不幸か、地震の恐怖と云つたものは、餘り持ち合せがない。と云ふのは、之れの强烈なのに、一度も出合つてゐないからである。可成りひどかつたと記憶してゐるものは、大正四年頃、櫻島の爆發當時のものと、昭和四年、箱根で出合つたもの位である。關東大震災の恐怖は、今更云ふ迄も無いが、僕は實際其の場に居合せた者でないから、別な意味に於ての恐怖であつた。

兎に角、地震の眞の恐ろしさを知らない僕である。

又火事にも經驗が無い。風呂の煙突から起つたボヤの孫位の事は無かつたでもないが、皆が注意するので、家からは火を出した事は一度も無い。火事と云

へば先づ百合野の山火事、京都の大丸の火事、山口の師範學校の火事位が僕の目の當りに見た火事である。だから地震同様ほんたうの恐ろしさを知らない。

ところが雷に至つては、小さい時から、隨分恐ろしい目に合つてゐる。物心ついて以來の恐ろしかつた記憶を拾つて見ても二つや三つでは無い。

未だ百合野に居た時の事である。

お向ひの大木に落雷したり、雷話から火が出たまではよかつたが、二三度眞上の避雷針に落雷した時には、全く生きた心地も無かつた。もう斯ふなると、ゴロ〳〵等とは云はない。只一面其處等が火の様にパッと眞赤になると同時にパチッと云ふ様な音がするばかりである。

其れ以來、雷を非常に恐はがる僕になつてしまつた。

ハッノの話に依ると、少し雲行きが惡くなると、心配さうに、空ばかり、眺めてゐたさうである。

其の時分、箱崎でも二回程二丁と離れない所に落雷した。

又中學時代であつたが、長府にもひどい雷があつて、七ヶ所にも落雷した事があつた。

近年メッキリ雷は少くなつた様である。

電氣の利用が盛んになつたせいもあるかも知れない。

以上で「地震・雷・火事」までは見て來たが。どうも、もう一つ僕は足らない様に思ふ。足らないと云ふより、〇〇に置き換へたいものが一つある。

其れは颱風である。

僕は生れて此の方二十幾年、最近まで、大風と云ふものを殆ど知らずに來た。只母から、昔は隨分ひどい風が吹いたものだと云ふ様な話を聞かされてゐるばかりであつた。從つて、颱風の恐怖等と云ふものは、皆無と云つていゝ僕であつた。

ところが、近年になつて、殆ど一年おき位に、颱風の襲來を受けて、しみ〴〵其の恐ろしさを知らされたのである。最近もちよい〳〵十五米から二十米位の颱風には出合つたし、昭和九年秋の近畿地方の大風害の慘狀は、未だ昨日の事の樣に思はれてならない。

併し、僕の經驗した中で、最も强烈であつたのは、昭和五年七月十八日の關門地方一帶にかけての大暴風雨だつた。何しろ三十米以上の風が、眞東から吹き付けたので、大木は倒れる、石燈籠はひつくりかへる、塀は飛ぶと云つた具合であつた。特にひどいと思つたのは、長府一帶の落葉樹と云ふ落葉樹の葉が、一夜にして枯れてしまつた事であつた。

先づあんな風はさう吹くものではあるまい。

最近では氣象台も颱風には非常に神經過敏になつて、豫報を盛んにやつてゐる樣であるが又故あると云ふべきである。

（一一・一〇・二六稿）

巢箱

此の屋敷には小鳥が澤山遊びに來る。

鵯（ひよどり）も來る、掠（かく）鳥も來る、鶯も來る、目白も來る、鵙（もず）も來る、と云つた風である。

名の知れぬ鳥も時々來てゐる。

其の一つに姿を少しも見せない、聲ばかりの鳥がゐる。

或人は「帝國（ていこく）〳〵」と云つて鳴いてゐると云ふのであるが、僕にはどうしても「ヘイコク〳〵」と鳴いてゐる樣に聞えて仕方がない。

又或時は、土地が土地だけに、飼鳥も飛んで來る。籠を逃げた白文や、十姉妹が遊んでゐる事がある。

雀等はちと多過ぎて寧ろ喧しい位である。春は軒と云ふ軒に藁をのぞかせて巢を營むし、秋には秋で鐵砲の音に驚いた稻雀は雲の如くに此の避難場所へと

殺到する。其の喧しい事と云つたらとてもお話にならない。

兎に角、樹木が多いせいか、實に小鳥は多い。

今年の春、庭の木に、巣箱を二つ三つ附けて見た。或は小鳥が巣を營むかも知れないと思つたからである。

殆んど巣箱の事は忘れた頃であつた。

頻りに雀が巣箱に出入してゐるのを見た。木の下に行つて様子をうかゞふともう雛になつてゐると見えて、ピイ〳〵と頻りに鳴いてゐる、梯子を持つて來て、箱の中を開けて見ると、正しく雀の子である。而かも、毛も生へない「どびん子」が、六羽もうよ〳〵してゐるのである。

當がはづれて、實にがつかりしてしまつた。

雀はもう澤山である。此の上殖へられてはたまつたものではない。

然し、亦そつと其のまゝにして置いた。

親鳥はせつせと餌を運んだ。

巣立の頃を見計つて、其の中の二三羽を捕へて來て、足に「小鳥を愛せよ」と書いた札をつけて放つてやつた。

丁度其の日が「動物愛護デー」だつたのである。

（一一・一一・一稿）

前畑ガンバレ

今夏ベルリンにて行はれた第十一回オリンピック大會に於けるラヂオ放送中で、河西アナウンサーがやつた例の「前畑ガンバレ」が最近大分問題になつた様である。

一部の人達は、あの餘りにも興奮した放送振りが面白くないと云ふのである。放送はもつと冷靜沈着にあつて然るべきだと云ふのである。興奮の餘り、實況放送てふ重大任務を忘れたものとして、其の輕薄な態度を攻撃してゐるのである。

而して、之れは一人河西アナウンサーの場合だけでは無い、多くの日本人に對する斯ふした場合の注意だとも考へる事が出來やう。成る程、日本人の大多數は、何とか云ふと、直ぐ興奮して、まゝ大國民的襟度を失する様な事が無いでも無い。

無闇に興奮する事は、確に惡い事に違ひない。もつと冷靜に、どつしりと落ち着いて居る事が良いに違ひない。

併し、短所は又同時に長所である事も考へねばならぬ。あの様な場合、いくら興奮するなと云つて見たところで、出來るものでもあるまいし、又さう注文する方が、無理ではあるまいか。河西アナウンサーの其の歸朝報告中に述べて居る様に「あの時は全く無我夢中で、何を云つたかさつぱり覺えて居りません。相手がケネンゲルだけに、もう勝たせたい一心でした。後でレコードを聞きましたが、恐ろしくて聞いて居られませんでした。何しろ、二十幾回も前畑ガンバレを云つてゐますからねー。」と。全くさもあらんと思ふのである。其れを一概に責むるのはどんなものであらうか。

元來、スポーツは一種の感激であり、興奮である。若人の力と熱との渦卷く

ところ、感激ならざるは無く、興奮ならざるは無い。まして國際的大競技に於ておやである。

感激無き人生は、實に物足らぬ淋しいものに違ひない。

感激が、往々にして、人生の進歩向上をもたらす事も有り得る。

併し、感激興奮の餘り、是非善惡の判斷を失ふ樣な事があつてはならない事は勿論である。

（一一・一〇・二〇稿）

鬼城翁

山口高商の「鳳陽會報」の俳句に、今春から、投句してゐる。其の選者が、鬼城翁だつたのだ。

其れ迄は、村上鬼城と云へば、俳句界の大先輩として、其の名は知つてはゐた。知つてはゐたが、只それだけの事だつた。然るに、遇然にも「鳳陽」を通じて、翁の添削を受くる樣になつたのである。

其の後、初夏の頃より、直接、翁のもとに、通信を以つて、添削をお願ひし、且其の敎へを受ける事になつた。

翁の添削は、實に嚴しいもので、容易に○などつかない。隨分ひどい評などされる。第一回の添削をお願ひした時に、左の如き、句作に對する心得が記されてあつた。

曰く「句を作るは、井戸替をする如し。
須らく、泥水を、汲み乾すべし。
而後、清水湧き出す。
勞を惜しまざれ。」

一本釘を刺された譯である。併し、之れがほんたうであらう。句作には、此の心懸けが第一だと思つて以來、つとめて句作（苦作？）に努力してゐる。

お蔭で、近頃は、どうやら○もつく様になつた。併し、◎は未だ數へる程もない。點の事ばかり云ふと、點取虫の様に聞えて、不愉快だが、やはり○がつくと嬉しい。而かも、大家の折紙がついたと云ふ安心と、自信がつく事は確かだ。

今年、お中元のしるしとして、奈良漬を少々お送りした。

其の返禮に

雷のだしぬけになる裸かな

の一句が書かれてあつた。

去る八月末、舛谷君を翁の居られる高崎へやつた。要件は、主として、揮毫のお願ひだつた。

翁は若い時からの聾（つんぼ）で、會話には、聽診器様の機械を使用するのださうだ。お話に依ると、東京で生れられ、高崎に移られてからもう五六十年にもなるさうだ。慶應二年生れだから七十二歳であらう。

翁は夙に青雲の志を抱いて、法律家か或は軍人たらんとして、勉學に勵しまれたのだが、不幸耳の病の侵すところとなり、中途にして、總べてを放棄し去らねばならぬ運命に立ち至られたのである。

翁の句に

治聾（ろうしゅ）酒の酔ふ程もなく覺めにけり

と云ふのがあるが、如何に其の爲、焦慮煩悶せられたかゞ分る。
併し、翁は、此の大なる痛手にも、屈する事はなかつた。心氣一轉、雄しく
も振ひ立つたのである。
其れ以來、專ら俳句に精進され、今日の大成をされたのである。
子規、鳴雪等の俳人に交りて、斯道に重きをなし、明治、大正、昭和の三代
に渉りての翁の功績は、又偉大なりと云ふべきである。
著述としては、鬼城句集の一、二と、續鬼城句集がある。
話が前後したが、今度お願ひした揮毫は、來る十一月三日の父上、母上のお
誕生日をお祝ひする爲、それに因んだ句をお願ひしたのであつた。心良く引受
けられた翁は「も少し涼しくなつてから書きませう。」と約された。
昨十月十八日、愈々翁からの揮毫が來た。

句に曰く

白菊の眞白に咲いてめで度いぞ

と云ふのである。
早速、表具にやつて、三日までに、間に合ふ樣に、表裝させやう。
その時、僕にと云つて書いてくれた一句が、實に面白い。

新米を食うて養ふ和魂かな

これなど確かに鬼城翁らしい句の一つと云へる。

（一一・一〇・一九稿）

鶴の一聲

昔から「鶴の一聲」と云ふ事があるが、其れは事實の樣である。

僕がまだ小學校の頃、毎年の夏休みを箱崎で過した。そして、箱崎水族館で、よく鶴の啼くのを聞いたものだ。

「クルー」と云ふ樣な一聲は、園内に響き渡つて、諸々の鳥は、音を潜めてしまふ。

昨年のよく晴れたある秋の日であつた。

空の彼方にあたつて「クルー・クルー」と確に鶴の聲らしいものを聞いた。

そこで、縁先に出て、仰ぎ見ると、果して鶴である。約一千米位の高さを、北から南へ向け飛んで行く。眞白な翼に陽を受けて、誠に美しい。そして、時

々例の「クルー」と云ふ樣な啼聲を空に響かせてゐる。

今年の春のある日、又もやけたゝましい鶴の聲に飛び出して見た。

去年と同じく、北より南へ啼きながら飛んで行く。

どちらも美事な丹頂の鶴であつた。

鶴の飛ぶのを初めて見た僕は、非常に嬉しかつたと同時に、意外なところで、鶴を見た事が、たまらなく不思議でならなかつた。

東京と云つても此處等は場末でもあり、元來が武藏野の原だから、或は鶴が來るのかも知れない、とも考へて見たが、只一羽と云ふのが少しあやしい。

兎に角、疑問のまゝ數ヶ月はたつた。

或る日の新聞に、次の樣な事が記るされてゐた。

「上野動物園の鶴の檻の外に、一羽の丹頂の鶴が舞ひ下りて來たので、捕へて、調べたところ、此れは、大宮御所に御飼育になつてゐる鶴だと解つた。」と。

（一一・一〇・一七稿）

H・Gウエルズの科學小說

H・G・ウエルズは現代英國に於ける第一流の著述家であつて、キプリング・ショーに次ぐ斯界の大立物である。彼は著述家であると同時に、文明批評家であり、且科學者でもある。而して、小說に、又文明批評に、獨自の領域を開拓し、科學的知識に加ふるに警拔な批評眼を以つて、世界的の名聲を博しつゝある事は、茲に喋々を要しないであらう。

僕は未だ高商在學中彼の作品である「盲人國其他」(The Country of the blind and other stories.) と云ふ本を讀んで以來、特に彼の科學小說に興味を感ずる樣になつた。其の本は「盲人國」と云ふ話の外に、數種の物語を集めた、短編集であつた。

「赤い部屋」(The Red Room) とか「ダイナモー大明神」(The Lord of the

Dynamos.）とか「奇蹟をでかした男」（The Man who could work Miracles.）と云つたのがあつた。

其れ以來、彼の科學小說は、或は譯文で、或は原文で、つとめて讀んで見た。皆奇想天外な小說ばかりだが、そこにある科學的もつともらしさが僕は非常に面白いと思つてゐる。

彼の著書は種々雜多であつて、彼をして有名ならしめたのは、何と云つても、彼の「世界文化史大系」（Outlines of History.）や「生命の科學」であると云はなければならない。而して、科學小說は、ほんの彼のお慰み程度に過ぎないものではあらうが、科學を通俗化し、科學物語をして今日あらしめた功績は、又大きいと云はねばならない。

近來、彼の科學小說からヒントを得、或は題材をとつた映畫が、時々出る樣になつた。

少々古いが、例の「メトロポリス」もさうだし、最近では「來るべき世界」などもさうである。又ロンドンニュースの報導に依れば「奇蹟をでかした男」も映畫化されてゐるとの事である。

僕は、數年前、科學小說「驚異の世界」なる一書をなしたが、之れ等は確にウエルズの刺戟を受けたるものであると云へやう。

兎に角、事程左樣に、僕の腦裡に、彼の作品は、強く深く食込んでしまつてゐるのである。

（一一・一〇・一九稿）

三題ばなし

龍 ―― 生命 ―― 星

「龍」と云へば、支那人の空想の所産と思つてゐたら、強ちさうでもなささうである。と云ふのは、蛇にも足や手の痕跡があるものがゐるばかりでなく、ちやんと手も足もあるものが實際居るさうである。して見ると、斯んなのから「龍」は生れたものらしい。

故に荒唐無形のものでは無く、依つて來るところのあるものと云へやう。

其れは兎に角、あの角を持ち、手に玉を掬み、雲に乘つて昇天する所謂「龍」ではないが、もう一つ「龍」と呼ばれる事實地球上に棲息してゐた動物があつた。其れは、今から一億年も前の事だが、地質學上、中生代と呼ばれる時代に、地球全土にのさばつて居た爬虫類の一族を云ふのである。

大きなものになると、全長百二十尺もある樣な「龍」が居たし、海にも、陸にも、空にも大小樣々の「龍」がはびこつて、互に弱肉强食の修羅場を展開してゐたのである。

ところで、そんな事はどうしてわかるかと云ふと、皆地中から掘り出される其れ等の化石や骨格から推定されるのである。

斯くの如くして、化石からは、其れ等よりも未だずつと以前に棲んでゐた原始動物の存在も、今日では、殆ど完全に知り盡されてゐるのである。

併し、窮極の生命即ち地球上に生命の萠芽が如何にして生じたか、云ひ換へれば、「生命の起源」は一向に解らないのである。天から降つたか地から湧いたか、皆目解らないのである。

古くから、あらゆる科學者、哲學者、宗教家が其の智能のありつたけを絞つて考へて考へ拔いたが、どうしても解からない。

或人は云ふ、神様が造つたのだと、或人は云ふ、化學變化で遇然出來たのだと……併し、未だ何れとも決してゐない。更に面白いのは、他の天體から、隕石に附着して、地球上にもたらされたものだと云ふのである。

して見ると、地球以外の他の天體にも、生命があると考へられて來る。

さて、地球以外の天體で、最も其の可能性のあるのは、火星である。古くから、火星には、人類が居て、大きな運河を作つたり、地球へ信號したりしてゐると云ふ様な事が吾々の好奇心をそゝつたものである。

火星人は、吾々人類より、數等進歩した頭腦を持つて、とても吾々の想像し得ない様な文明を樹立してゐると云ふのである。

併し、此の說は、どうやら、近頃では、怪しくなつて來た。

植物や下等動物は居るにしても、そんな發達した動物は居ないと云ふのが、通說の様である。

何は兎もあれ、例へ他の天體から生命の萠芽が運ばれて來たにしても、結局、其の他の天體の生命はどうして發生したかと考へて來る時、容易に此の問題は解けさうでもない。

生命問題こそ、吾人に課せられた、至大至高の難問であつて、今までさうであつた様に、之れから先も、永久に、人類への謎として、殘されるであらう。

（詳細は拙著「火星其他」參照）

（一一・一〇・三〇稿）

熱帶魚

今年の夏は、熱帶魚が、大變流行した樣である。

熱帶魚の中でも、最も美しいエンゼル・フィッシュ等は、盛んに、色んなものゝ模樣につけられたりした。

僕も飼ひ度くなつて、最も飼ひ安く、且つ安い「ムーン」と云ふのを二三種買つた。「ムーン」には「レッド・ムーン」とか「ブリュー・ムーン」とか「ゴールド・ムーン」とか云ふ色々の種類がある。

原產地は、メキシコださうだが、何の事はない、目高を少し大きくした位のものである。

八寸角位の容器には、砂を敷き、其れに藻を植えて、之れに清水を滿たすのである。又其の中に、貝を入れて置くと、魚が食べ殘した餘分の餌を食つてやり、水が濁らないでいゝと云ふので、其れも入れて見た。餌は、粉餌を少しづゝ與へた。

其の內、雌の腹が、大きくなつて來た樣だつたので、或は仔を產むのではないかと、樂しみになつて來た。

此の魚は、珍らしい事に、胎生なのである。小さな仔が生れたら、さぞ可愛いだらうと、毎日眺めてゐた。ところが、知らぬ間に、次々と、容器から飛び出して、今は二匹になつてしまつた。

そして、依然として、雌の腹は、太いが、一向に、仔を產む樣子も見えない。

近頃では、もうすつかり飽かれてしまつて、洋館の隅に、置きつぱなしにされてゐる。

流行の末路は、大概斯んなものである。

（一一・一〇・二七稿）

空の寵兒

(イ) 空の虱 (Pou-du-ciel)

「空の虱」と云つても、決して、虫ではない。佛國のアンリー、ミニエーと云ふ男が、發明した、飛行機の名なのである。何故虱などと云ふ穢ない名をつけたか詳でないが、其の形が、小さいので、斯く名づけたものであらう。虱と云はれる程に、此の飛行機は、實に小さいのである。翼の長さが六米、全長 三米五、自重僅かに百瓩しかない。其れでゐて、誰にでも操縱が出來、絶對に失速せず、其の上安價と云ふのだから、飛行ファンにとつて、此の上有難い事はない。

此の大衆性が大いにうけて、フランスは勿論、歐洲全土に、すばらしい勢で流行し始めた。

日本にも、昨年あたりから、ボツ〳〵其の姿を見る様になつて來た。

僕も二三度之れが、自動自轉車の様な音をたてゝ、飛行してゐるのを見たが、案外速力は出る。

日本に輸入されてからは虱とは餘り穢い名だと云ふので「雲雀」と名命された。

最近の雜誌を見ると、ロシアでは虱から進歩した「蚊」と云ふのが出來たさうである。次は「ガヽンボ」等と云ふのが出來るかも知れない。

斯ふした安全な誰れでも操縱出來る輕便飛行機がどん〳〵出來て、一寸散歩に飛行機でと云ふ時代が、一日も早く來る事を祈つてゐる。

(ロ) 空中列車

獨逸のグライダー王ヒルトの來朝以來、日本に於けるグライダー熱は、頓みに昂まつた様である。

方々に何々グライダー倶樂部とか、何々グライダー聯盟とか云ふものが、雨後の筍の様に、出來始めた。學生は勿論、軍部までが之れに力瘤を入れ始めた。

云ふまでも無く、發動機の無い飛行機であるグライダーは、普通の飛行機と同一に論ずる譯には行かない。が併し、グライダーと云つても、なか〳〵馬鹿にならないもので、何十時間と云ふ長い時間飛び續けたり、一息に何百粁と云ふ距離を飛翔したりする。けれ共、普通の飛行機の性能とは、とても比べものにはならない。

そこで、將來のグライダーは、曳航(えいこう)飛行に依る方法が、最も有望視されて來た。

グライダーの曳航とは、飛行機に依つて、グライダーを曳きながら飛行する事である。

其れも一臺のグライダーで無く、二臺も三臺も曳く事がある。斯ふなると正しく空中列車である。

外國では、早くから、やつてゐるが、日本でも、漸く、此の程、東京大阪間の其れに成功した様である。

僕も今年グライダーの曳航を初めて見た。

之れが發達した曉には、今の飛行機は先づ機關車の役目しかなさない事になつて、お客は皆音も震動も無いグライダーの客車に乘ると云ふ様な事になるかも知れない。

要するに、空中列車はグライダーの實用價値の最もよき表現と云ふべきである。(詳細は拙著「明日の飛行機」二二〇頁——二三二頁參照)

(ハ) オートジャイロ

オートジャイロはスペインのシェルバに依つて考へられた特種飛行機である。

普通の飛行機の様に、翼が無く、其の代り、大きな風車を附けた、風變りな飛行機である。

其の特徴は、着陸や離陸の時、殆ど滑走を要しない事である。又若しも發動機に故障が起つても、墜落の危險が殆ど無いと云はれてゐる。

僕は昭和八年春、代々木で之れが公開飛行を見たが、何の事はない、竹蜻蛉が飛んでゐる様なものである。

けれ共、狹い場所から發着出來ると云ふ長所を持つてゐる此の種飛行機の將來は、實に洋々たるものがある。

ビルディングの屋上から飛び上つたり、ヒョイと庭先に降りたり出來る飛行機は、考へて見ただけでも愉快では無いか。（詳細は拙著「明日の飛行機」二〇五頁――二二〇頁參照）

（二）ロケット

現在の飛行機の行詰りを打開し、將來之れに取つて代るべき飛行機にロケットがある。

其れは機體の尾部から凄じい勢の瓦斯を噴出し、空中を飛行するものである。

ロケットはずつと古くから、火箭（かせん）として、武器又は通信用に使用されたもので、決して新しい考案とは云へないが、之れが飛行機への應用は、極く最近の事である。米國のゴッダードや獨逸のオーベル等の熱心な學者に依つて、次第に進歩發達して來てゐる。

或る人は云つてゐる。「現在ロケットの性能はさして大なるものでは無いが、近き將來に於ては、ニューヨーク・サンフランシスコ間を三十分、サンフランシスコ・香港間を一時間半、五時間で世界一週をする超速度ロケットを作る自信がある」と。

其の言葉にして眞なりとすれば、次は月世界への飛行であらう。
斯く考へる事も強ち夢物語りでもあるまい。（詳細は拙著「明日の飛行機」二三二頁――二五〇頁參照）

（一一・一〇・三〇稿）

ももんぐわ

一昨年の秋、此の屋敷に引越して來た當分、夜な〳〵「ギャー〳〵」と云ふ異樣な鳴き聲に薄氣味惡い思ひをしたものである。
何だらう？……と闇を透かして見るが、高い松の木の上あたりで鳴いてゐるらしく、一向に姿がわからない。
一寸聞くと、赤ん坊が泣いてゐる樣だが、そんなまやさしい聲ではない。寧ろ何かが締殺されてゐる樣な凄い聲なのである。
鳥？　獸？　何？
皆目其の正體は解らない。
鳴聲は毎夜續いた。……
「ギャー〳〵」と云ふ聲は、或は裏の森で、或は庭の松の木で、遠く近く聞

えるのである。

奇聲を聞く毎に、肌えに粟を生ずる思ひがしたものである。

或夜の事――Eと云ふ下男が、とう〳〵見付けた。見付けたと云ふより、出會したと云ふ方がよからう。出合ひ頭に猫の様なものが松の木に逃げ上つたと云ふのである。

そして、此の男は、其れが奇聲の主の「もも んぐわ」だと主張した。

「もも んぐわ」と云つても、初め僕等には通じなかつたので、字引を引いたりして調べて見ると「もも んぐわ」とは、鼯鼠の事であつた。

色々と問ひ正して見ると、尾が非常に大きいところや、動作の敏捷な點等からして、どうも、鼯鼠だらうと云ふ事にきめてゐた。

其れから暫くして、ラヂオで佛法僧の鳴聲を放送した事があつた。

其の時、鼯鼠の聲だと云ふのがマイクに這入つてゐた。其れは正しく例の「ギ

ヤー〳〵」と云ふ無氣味な聲であつた。

元來、深山幽谷にしか居ない鼯鼠が、どうしてこんな人里にやつて來たか、どうも腑に落ちない。腑に落ちないが事實正眞正銘の奴が居るのだから仕方がない。

けれ共、東京と云つたところで、此處などは、ずつと郊外の事だから、或は不思議はないのかも知れない。

先日、齒醫者さんが來て「此處もやつぱり東京ですか」と尋ねた位淋しい所である。

其れは兎に角、鼯鼠と解つて以來、大膽になつて、どうにかして、其の姿を見やうと、月の夜など、松の木を幾度か見上げて見たが、一向其れらしいものは見當らなかつた。

今年は未だ一向に鳴かない様である。或は所を變へたか、人に捕へられたか、

何は兎もあれ、あの奇聲が、聞かれないのは、淋しい思ひがする。

（一一・一一・五稿）

お笑ひ草

去年の今頃（十月）腸の疾患で、ひどく難儀した事があつた。其れを聞いた長府の妹が、大變心配して、お見舞だと云つて、飛行機に因んだ玩具を送つてよこした。僕が飛行機が好きだからだらう。其れが毎日〳〵一つづゝ送つて來る。其の內、病氣の方はすつかり全快したが、引續き玩具の方はやつて來る。「もう病氣も治つたのだから、中止したらどうか。」と云つてやつたが「もう暫く送る。」と云つて來た。「そんならお見舞と書くのはおかしい。一つお笑ひ草とでもしたら……。」と云つてやつた。其れからお見舞が變じて、お笑ひ草となつたのである。

お笑ひ草となつてからも、依然其の贈物は續いた。そうして、とう〳〵先日で、滿一ヶ年、之れが繼續したのである。

滿一ヶ年三百六十五否今年は閏年だから三百六十六も飛行機に關する玩具を集めた譯である。いくら飛行機に因んだものが多い時代とは云へ、之れだけ色々の品を物色する事は、仲々容易な業ではない。

多美子からの手紙に依ると、隨分其の間には苦心談や珍談があつた樣である。

或る店では。買はないと云つて、塩を撒かれたり、或は萬引と間違へられて、うさんくさい目でじろ〳〵見られたり、或は餘り店の品を勝手に引き出すので、大目玉を食つたり……いやはや仲々の苦心であつたらしい。

買出しは、主として、關門地方だが、時には、遠く小倉、八幡、福岡地方まで遠征に出かけるのである。

兎に角、斯ふして一ヶ年と云ふもの、毎日〳〵お笑ひ草は續けられた。

滿一年になつた期會に、もうそろ〳〵品切れで、物色にも骨が折れるだらうから止めさせ樣と思つたが、未だ出來るだけさがして、續く限り送ると云つて來てゐる。

無理に中止させてもと思つて、本人の意志に任かせる事とした。

其の中に飛行機に因んだ物も品切れとならう。

多美子は云つてゐる。「之れは決して私一人の力ではありません。私に附いてゐる久保田さんとヒロの助力のお蔭です。」と。

（一一・一〇・二二稿）

無花果

マーチン先生は、牧師であり、且高商の教師である。

山口大殿の僕の宿の筋向ひが、先生のお宅であつた。

蔦の這つた、煉瓦塀を巡らした、二階建の可成り大きい家であつた。廣い庭には、テニスコートも出來てゐた。

先生は、三十四五であつたが、未だ獨身であつた。僕は、近いので、度々一緒に散歩に出かけたりした。

次第に親しくなるに從つて、先生と云ふより、友達の樣な氣輕るさで附合つた。又先生も弟の樣に可愛がつてくれた。

學校ではキプリングの小說なんか講義して居られたが、少しもブラないので、

學生のうけは頗る良かつた。

或時は、彼方の唄を習つたり、寫眞帳を見せてもらつたり、トランプをしたりした。

時々は晩餐に呼ばれた。そして、ナイフ・フォークの扱方から、スプーンの使方まで、一々敎へてくれた。料理は女のコックがやつてゐたが、非常に上手だつた。餘り料理が旨いので、ハツノにも此の人に習はさうと思つてゐたが、遂に其の機を逸したのは、今も惜しい樣な氣がしてゐる。

其の返禮に、僕の宿にも、何回かは、夕食にお呼びした。下手な洋食を出して、笑はるゝより、日本料理の方がいゝと思つて、大抵純日本式のお膳を出した。

先生はもう永く日本に居るので、上手に箸を操つて、御飯を旨さうに食べた。一般に外人は、お刺身や漬物を嫌ふが、お刺身でも漬物でもおいしい〳〵と云

つて食べてくれた。

只困るのは、長く座る事らしい。何しろ、先生は、六尺二三寸と云ふ長身だから、低い食卓に足を折り曲げて座るのが、ひどく苦痛の様だつた。其んな時は、長い足を卓の下に延ばして「これでやつと樂になつた」と云つて、笑つたりした。

先生の庭に大きな無花果の木が數本ある。

秋になると、先生が梯子を持つて來て、自分でもいで、之れを僕等にくれた。入れるものが無いので、帽子に一つぱい詰めて、歸つたものだ。

食べて其んなに旨いものでもないが、一つ〳〵を、先生が、わざ〳〵僕等の爲に、取つてくれたのかと思へば、味もいゝ様に思へた。

又、筍が出來れば、自分で掘つて、二三本ぶら提げて來てくれた。

斯んな時、何時も當方から、何も差上げる物が無いので、心苦しく思つた事

だつた。

冬は、山口は、寒い。僕の大殿の宿は、ストーブも無かつたので、冬の夜は、毎夜の様に、先生の宅のストーブに當りに出かけた。そして、眞赤に燃えるストーブを圍んで、密柑等喰べながら、四方山の話に花が咲いた。

斯んな時は、大抵室園君と一緒だつた。

斯ふして、先生とは、實に親しくお附合してゐたが、僕等が二年の折、一旦アメリカのお國へ歸られる事になつた。そして、結婚して、又歸つて來られた。

併し、其の時は、僕は、もう、卒業して、山口には、居なかつた。

暫く山口に居られた様だが、今は大阪である。

「去る者は日に疎し」とか、あれから七八年、何時も當時の樂しかりし日を偲ぶのではあるが、一年に一度のクリスマスカードも缺禮がちとなり。誠に申譯無く思つてゐる。

三四年前、お子さんと一緒に寫られた寫眞が送つて來た。

（一一・一〇・二五稿）

目黒の秋刀魚（さんま）

落語に「目黒の秋刀魚」と云ふのがある。

昔あるお殿様がハイキングをなさつて、御出でになつたのが、目黒の里であつた。丁度お午時分の事とて、大分腹が北山（空腹の事）になられたお殿様は、とある一軒の百性家にずいとお這入りになり、此處で、晝食をなさる事になつた。

其の時、此の家では、丁度、秋刀魚を燒いて居つた。ぷん〳〵と良い匂ひが、お殿様の空腹を刺戟したからたまらない。

「これ〳〵供の者、大層旨さうな匂ひがするではないか。余は所望致す。苦しうない、持つて參れ。」之れを聞いた家來共は、互に顏を見合せて、暫し當惑したが、恐る〳〵御前に運んだのが、眞黒になつた秋刀魚の塩燒であつた。

之れを食べられた殿様は、意外の珍味に、骨も殘さず平げた。

「もう一こん所望致す。苦しう無い、持つて參れ。」とか何とか云つて、又ムシャ〳〵と、さも旨さうに食べられた。

御城に歸られた殿様は、其の味が忘れられず、食べたくて〳〵たまらないのだが、お城では、そんな下すなお魚は、とてもお口には這入らない。遂に、内密で、お料理番にお指圖があつて、秋刀魚をお膳に供へる事になつた。殿様は、大喜びで、お膳に向はれたが、一向それらしい物が見當らない。御家來を呼んで、お尋ねになると、慥に秋刀魚を差上げてゐると云ふ。

だん〳〵調べて見ると、秋刀魚には違いないが、之れを完全に油抜きしたものを、小さく五分位にきざんで、餡かけにして、蓋物に盛つて、出したのであつた。

これでは、旨からう筈が無い。

そこで、殿様は

「秋刀魚は、目黒の秋刀魚に限る。」と仰せられたとさ。

之れが落語の「目黒の秋刀魚」の荒筋である。

僕の様に、九州地方で育つた人間は、秋刀魚と云ふものは、殆ど食べた事が無い。あちらでは餘り獲れないものと見える。そこで、こちらに來てから、其のほんたうの味を知つた譯である。食ひつけないせいか、僕には、鰯の方が旨い様に思へる。が、併し、旨いものには違いない。

旨くて、榮養があるのだから、下魚どころか、上魚である。

目黒で思ひ出すのは「目黒の筍」である。此處に來て、二年になるが、未だ一向に旨いのに當らない。數があるにはあるが、極、貧弱なものだ。筍は、何

と云つても、京都の筍だらう。

後記

（一一・一〇・一八稿）

十一月二十日、愈々父上方が、三年振に御上京と決つたので、次の一句を打電した。

久かたの客もてなさむ秋刀魚かな

非常時と云ふ言葉

滿洲事件以來、非常時と云ふ言葉を、我々は、耳にタコが出來る程、聞かされた。

而して、非常時とは、一種の流行語にさへなつてしまつた。非常時〳〵と云ふが、一體、我々のみが、現在に於てのみ、非常時に逢着してゐるのであらうか。

否、吾人の祖父母も、吾人の父兄も、亦遠く遡つては、吾人の祖先も、皆一度や二度、斯ふした苦しみは嘗めて來たものである。

而して、其の都度、彼等は、協力一致して、其の難關を突破して來たのである。其處に我が大和民族の偉大さを見出すのである。

非常時を、我々の、又我々の時代のみの、專賣と考へてゐるのは、大なる誤

りである。近くは日清、日露の兩戰役の如きは、今の非常時以上の非常時であつたに違ひない。明治維新も或る意味での非常時であり、古くはペルリの來航、ずつと遡つては、蒙古の襲來等は、正しく大非常時であつたのである。

之れ等の非常時に比べて、現下の非常時は、決して、小さいとは云はないが、一面其れは、國力伸展の道程に於ける、種々の障碍に他ならない。斯く考へる時、非常時も亦、我が國前途の爲、大いに祝福すべき事でなければならない。

我々は、非常時の名のもとに、萎縮する事なく、協力一致、之れが克服に、勇往邁進すべきである。

幾そたびかきにごしても澄みかへる
水や御國の姿なるらん

（一一・一〇・二九稿）

三つの W

三つのWは魔物である。

WINE（酒）・WOMAN（女）・WING（翼＝飛行機）が之れである。

而して、WINEもWOMANも我々にとつて、魔物である事は勿論だが、少くとも僕にはWINGの其れ程恐るべき魔物は無い。

WING・WING・WING、おゝ恐るべきWINGよ！

僕が飛行機と云ふものに病みついたのは、物心ついて間も無い頃だ。以來、病勢は一進一退、良くもならねば惡くもならぬ、此の處慢性と云つた形である。

併し、困つたのは、時々發作が起る事である。發作が起ると、模型飛行機を作り出したり、飛行場見學に出かけたり、飛行機に乘つて見たり、飛行機の本を書き始めたり、飛行機の蒐集に凝つたりする。實に以つて、正氣の沙汰では

ない。

併し、其れが病氣なのだから仕方がない。

色々治療も試みたが、一向治らない。どうやら不治の病らしい。

模型飛行機は、隨分小さい時分から、幾十幾百となく作つた。飛ぶのも作るが、主に紙製の僕獨自の實物模型である。作つては壞はし、壞はしては作る。これが小學校から中學時代の唯一の樂しみだつた。

飛行場見學は方々へ出かけた。併し、太刀洗が比較的近かつたので、何度となく同飛行聯隊へは見學に行つた。未だモ式やサルムソンのはなやかなりし頃の事だ。

又飛行場の見學ばかりでは無い。凡そ飛行機に關係ある事なら、十里を遠しとせず出かけた。或時は飛行競技に、或る時は博覽會に、或る時は鄕土訪問飛

行にと云つた具合に。

確か大正九年頃だつた。第二回郵便飛行が、大阪久留米間で行はれた時など、わざ〳〵久留米まで出かけて行つた。其の時、高橋飛行士の飛行機が、着陸の際、ひどくバウンドして、ペチャンコになつたりした。

鄕土訪問飛行では面白い話がある。長府から一二里離れた海岸で、或る時、或る飛行士が、之れをやつた。早速自轉車を飛ばして出かけたまではよかつたが、生憎一錢の持ち合せもなかつた爲、渡舟を斷られたり、入場料が拂へなかつたり、泣き出したい樣な思ひをした事があつた。

飛行機製作所へも方々出かける。名は遠慮しておくが、其れ等の工場では、何れも軍用飛行機の製作を盛んにやつてゐる。すばらしい試作機等見ると、心强い限りだ。此の關係で、航空界の知名な人を相當知つてゐる。

斯んな事が昂じて、とう〳〵飛行機に乘つてしまつた。所は福岡、時は大正

十五年。

此の事は詳しく「思ひ出」に書いてゐるから茲には述べない。

或る意味での「死戰を越へた」僕である。

今日迄に、飛行機に關する本は、三つ書いてゐる。貧しい資料と、貧弱な知識を絞つて、其れでどうやら書き上げたのが「最近の飛行機と將來」、「明日の飛行機」、「最新飛行機集」の三つである。

其れ等の本は、方々の飛行關係者に送つて、評を乞ふたものである。協會の四王天中將や、帝大の小川教授等から賞められたりした。「盲人蛇におぢず」とは、斯んな事を云ふのだらう。

又飛行機に關するものゝ蒐集は色々とやつた。プロマイドを集めたり、プロペラーを物色したり、飛行機の實物模型を蒐集めたりした。プロペラーの如きは、苦心慘澹、七八本も集めたが、場所をとつてどうにもならぬので、一二本

を除いて、皆飛行協會へ、寄贈してしまつた。實物模型の事に就ては、本書中にも述べてゐるから、茲には書かない。

未だ〳〵書けばいくらも面白い事があるが、切りが無いから此の邊で打ち切る。

ナイルス、スミス時代からの飛行ファンである。又古いかなである。

そして、飛行狂たる事に今も昔も變りの無い僕である。

飛行協會の會員になつたり、日本航空學界の贊助員にされたりして、之れに甘んじてゐる僕ではある。

（一一・一〇・二四稿）

山雀

山雀を此の春から飼つてゐる。

籠の戸を開けてやると、お社へピョイ〳〵と行つて、喙で、扉を開け、御籤を咥て來る。取つて來れば、御褒美として、麻の實を一粒やる。すると、兩足に、しつかと、其れを掴み、喙でコツ〳〵と啄く。全身の力を頸と喙に集注して、コツ〳〵とやる。一寸啄木鳥に似てゐる。五六度もやつてゐると、麻の實は、眞二つに割れる。割れると、殼をポン〳〵と喙で捨てゝおいて、中の眞白い實を少しづゝさも旨さうに食ひ始める。決して一口に食べない。少しづゝ、味ひつゝ食ふのである。其れが丁度、舌鼓でも打ちつゝ食つてゐるかの様に見える。

食ひ終ると、又籤を取りに行く。そして、又一つありつく。

麻の實一つ貰ふのも容易な業でない。

併し、此の藝は、毎日必ず一度はやらせぬと、忘れてしまつて、うまくやらない様になる。其の爲、道を忘れて、うろ〳〵する様な事もある。

來た時は、此の藝だけしかやらなかつたが、釣瓶釣りも敎へたら、直ぐ覺えた。仲々賢い鳥である。時々釣瓶の糸を脚にからましたりしたが、其の中上手になつた。

知らぬ間に、二三度、籠から出て、逃げた事もあつたが、翼が切り詰められてゐるので、直ぐ掴へる事が出來た。

九月頃、小鳥小舍を新に作つたので、此の廣い籠の方に移してやつた。

開放されたので、非常に嬉しさうに飛び廻つてゐた。

先日の事だつた。一寸した不注意から逃してしまつた。

ところが、此度は、翼が延び揃ひ、且つ廣い籠で、飛び馴れてゐた爲、どう

しても摑へる事が出來ない。麻の實を撒いたり、鳥籠を持つて來たり、色々苦心して見たが、段々高い木の枝へ移つてしまつて、とう〳〵何處かへ飛び去つてしまつた。併し、あんなに馴れてゐたのだから、又歸つて來るだらうと思つてゐたが、其れつきり戻つて來ない。

いくら可愛がられたところで、籠の鳥は、籠の鳥である。やはり、彼等には、山の古巣が、一番いゝのである。

（一一・一〇・二八稿）

水だ！マスクだ！スキッチだ！

若しも戰爭が始つたと假定したら、今度の戰爭は、立體的のものと云ふ事が出來やう。

今までの過去に於ける戰爭は、專ら平面的な、海の上とか、陸の上とかゞ戰場であつたが、潛水艦と、飛行機の進步發達が、遂に戰場をして、立體的ならしめたものである。

海中も、空中も、何れも彼我相擊つ新戰場となつてしまつたのである。

又昔の戰爭は、第一線部隊のみの戰爭であつたが、今後は國民全體が、戰爭に參加せねばならぬ事になつて來た。即ち、今後の戰爭は、國家總動員で戰ふものになつて來たのだ。

一朝事ある場合には、老若男女を問はず、皆戰場にある覺悟が必要となつて

來たのである。

斯くなつたのは、主として、航空機の發達に依るところが多い。

飛行機は、平常は、お客を乘せたり、荷物を運んだりする頗る平和な文明の利器であるが、いざ戰爭となれば、忽ち恐ろしい惡魔となつて、我等に襲ひかゝるものである。

我が國は木造建築が多いから、空襲に依つて蒙る被害は、直接爆彈に依る損害よりも、之れに依つて起る火事の方が恐ろしいのである。又燒夷彈と稱する專ら火事を起させる彈丸の投下を覺悟しておかねばならない。

斯んな場合、最も必要であるのは、云ふ迄もなく、水である。

尤も、燒夷彈は、水をかける位では、仲々消えないものだから、土砂等を以つて、之れを鎭火せねばならない。

共れは兎も角、若し爆彈や燒夷彈が、我家に投下されたら、消防や防護團の

力にのみ賴る事なく、家族の者で、逸速く、適宜の所置を施して、大事に至らせないのが我々の任務である。

恐るべき燒夷彈も最初の三十秒前後に於て、之れを所置すれば、少しも恐るゝに足らないものださうである。斯る覺悟と訓練は、國家の一員として、平常から、なしておくべきであらう。

又以上に增して恐るべきものは、毒瓦斯彈の投下である。涙が出たり、嘔(くさめ)が出たりするのはまだしも、窒息(ちつそく)させたり、ひどいのになると、糜爛(びらん)させる樣な恐ろしい瓦斯も投下せられるのである。

そして、共れは戰場より、寧ろずつと後方の都會に主として投下されるのだから、茲にまた非戰鬪員たる一般國民の覺悟と訓練が必要となつて來る。

毒瓦斯の豫防にはマスクがある。大抵の瓦斯は之れで防ぎ得るが、糜爛性の瓦斯に對しては、身體全體を護謨(ゴム)で包まねばならない。又マスクの外に、防毒

室を作つたり、防毒蚊帳を吊つたりして、其の害毒から、逃れるのである。

防毒室は、完全に密閉されてゐなければ、何にもならない事は云ふまでも無い。又蚊帳は最近發明されたもので、紙やセロファン等で作り、相當効果がある様である。

僕は今年、マスクを一個求めた。之れは研究用としてではあるが、多くの國民が、平常から、斯ふした用意をしておく事は、非常に必要な事であると思つてゐる。

次に防空に最も大切な事は、燈火管制である。

燈火管制はなぜ必要かと云へば、敵の飛行機は、多く夜か夜の引き明けに空襲するものだから、燈火を消して、何處が都會であるかわからない様にするのである。斯ふすれば、敵機は何處に爆彈を投下してよいかわからないので、遂に退去を餘儀なくされてしまふのである。

ところが、茲に燈火管制を、はき違へてゐる國民がちよい〳〵ある事は遺憾である。

其れは、燈火管制だから、燈を消して、早く寢てしまふと云ふのである。之れは飛んでも無い間違ひで、一々そんな事をしてゐたら、戰爭の場合、どうにもならないであらう。

燈火管制の目的は、不用の燈火を消し、必要の燈火は之れを外部に光が洩らぬ様にして、各自の仕事は、平常通り遂行するにある。其れを全部消してしまつては、個人の活動は勿論、國家の生産活動まで、停止してしまひ、其の結果戰爭の勝敗にも影響する様な重大な結果を齎らすのである。

此の訓練をするのが防空演習の目的である。

最後に、之等にも增して恐るべきは、空襲に對する國民の精神的恐怖である。敵機を見て周章狼狽(しゅうしょうろうはい)してしまふ様な事があつてはならない。

斯ふなつては、敵の思ふ壺にはまつたものと云へる。なぜなら、敵の空襲の一面の目的は、國民をして、恐怖せしめ、戰意を失墜せしむるにあるからである。

斯る事なき樣、平常からの訓練が必要となる所以である。

空襲だ！

水だ！

マスクだ！

スキッチだ！

（一一・一〇・三一稿）

毛生藥

先日百合野の十六ミリが長府から送つて來た。

早速試寫して見たが、可成よく撮れてゐた。

百合野にはもう十年近くも行かないので、非常に懷しく思はれた。

四ッの歳から、小學校卒業までを此處で過した僕には、第二の故郷であり、從つて懷しい思ひ出が澤山あるのである。

今、舊著「思ひ出」に載せてゐないさうした思ひ出の二三を記して見やう。

未だ五ッ位の時である。家に原と云ふ車夫が居たが、其の家内が何時も手傳に來てゐた。

此のおばさんは、昔の人がやつた樣に、眉毛を常に剃り落してゐた。僕には、

其の眉毛の無い顔が、不思議に思へてならなかつた。考へた末、毛が生へてゐないのだと感違ひした僕は、毛を生やしてやらうと思ひついた。そこで、アルコールに何かを混ぜた毛生藥（？）を、勿體らしく持つて行つてつけてやつた。おせつかいにも斯ふして毎日つけてやつてゐる内に、段々黒く毛が生へて來たではないか。いや、喜んだのなんのつて、早速皆に其の事を吹聽したものだ。

剃つた後が、日數が經つて、次第に延びて來たとは、夢にも知らなかつた僕である。

又斯んな事もあつた。お向ひの屋敷に、槇の木が澤山あつて、之れに括猿の様な赤紫の實がなる。近所の子供が來て、盛んに之れを取つては食べてゐるのが、とても美味しさうである。僕も食べたくてたまらないが、其の時分生の果物は、一切食べてはならないと云はれてゐたので、指を咥えて見てゐた。すると、近所の子が二ッ三ッちぎつて來て

「坊ちやん、これ食ひない。うまいばい。」と云つてくれた。

そこで、恐る〳〵其の一つを食つて見ると、之れは又、實に美味しい。もう一つもう一つと云ふ様な譯で、とう〳〵二三十も食べた。

すると、ハツノがお風呂の迎へにやつて來て、連れられて歸つた。

僕はつとめて平靜を裝ふてゐたのだが「思ひ内にあれば、色外に現れる」の例へ通り、何だかそわ〳〵してゐるのをハツノが見てとつた。僕の顔をいやに覗き込みながら「坊ちやま、何かお食べになつたでしよう」と急所を一本やられた。ハツとしたが、何食はぬ顔をして、頭を左右に振つた。「いゝえ。ちやんと證據があります。お隠しになつても駄目です。」と來た。

「どうしてわかるの？」と聞いたら「口元に一つぱい何かついてゐますよ」と云ふのである。之れには流石の僕も完全に兜を拔いでしまつた。槇の實の紫色の汁は、なか〳〵とれないものである。

最後にもう一つ内證話をしやう。

七八才の頃は手におへないやんちやをやつた。

或時は物差を刀代りに、誰彼の用捨なくぶつて歩いたり、女中の髷を引き出したり、いやはや飛んでもないいたづらをしたものである。斯んな事をすると、必ずお母さんから土藏に入れられた。

「もうしません〳〵」と泣きながら、引張られて行つて、ピシンと入れられてしまうのである。暫くは泣きわめいてゐるが、何時か泣き寢入りしてしまう。

餘りおとなしいので、心配になつて、お母さんが來て見ると、行李の蓋の中に寢てゐたりしたものだ。無邪氣なものである。

一週間位は、神妙にしてゐるが、又やり始める。

斯んな事も、今は、懷しい思ひ出の一つである。

（一一・一一・三稿）

其の頃を語る

此の一文は、昭和八年、山口高商弓道部後援會々報たる「鴻鳳」創刊號誌上に載せたものであるが、茲に再錄する。

今回は、皆さんの御盡力に依り、芽出度く、吾が山口高商弓道部後援會が成立致しました事を、衷心より喜ぶものであります。此の記念すべき秋に當りまして、聊か弓道部創立前後の事共、思ひ出ずる儘に書き連ね、當時を回想して見る事も亦强ち徒爾ではあるまいと思ひます。そして、之れを以つて、御挨拶に代へやうと存ずる次第であります。

其れは忘れもしない昭和三年も終り少くなつた頃——例の鳳翼颪が吹き始め、卒業論文に頭を捻つてゐる時分——當時一二年であつた數人の諸君から、

數から棒に、斯んな話を持ち込まれたのでありました。其れは、弓道部を創設しやうと思ふから、私に幹事になつて世話をしてくれないかとの事でした。

話は少し前に戻りますが、元來、私は、中學の頃から、大弓に趣味を持つてゐまして――無論全然の我流でしたが――只無茶苦茶に射つておりました。

其れで、山口に來てからも、弓がやりたかつた事は勿論ですが、高商に弓道部は愚か矢場さへも無く、且一般に、山口と云ふ所が、餘り弓道熱の盛んでなかつた關係から、別に之れと云ふ矢場もありませんでしたので、止むを得ず、暫く中止して居りました。けれ共、其の當時の私としては、之れを全然思ひ切つてしまふ事は、相當苦痛でしたから、自分で卷藁を作つて、宿の庭で之れを射つて心棒しておりました。けれ共、其れは到底私を滿足させるものではありませんでした。所が幸な事には、高商の寄宿舍生諸君數人が―今もあると思ひますが―龜山に向つた射的場で、放課後、弓を射つてゐる事を知りまして、早速此の仲間に入れて戴き、やつと救はれた樣な氣が致しました。

けれ共、其れは只弓が射てると云ふだけで、元來が前に申した樣に、射的場なんですから、矢場としての設備等は無論ありませんでした。そして、又弓をやつてゐる連中も、大部分が、ほんの面白半分、遊び半分やつてゐる人ばかりで、そこには、弓道部とか、弓道倶樂部とか云つた何等の組織も人的統制もない、只我勝ちに一二本の弓を引張り合つて、何とも知れぬ手つきで、亂射してゐた程度のものでありました。けれ共、暫くの間は、只もう、弓が射れると云ふ喜びに一杯だつた私は、何等其れ等に考へを向ける暇がありませんでした。

併し、何時とはなしに私は之れに大きな物足りなさを感じて來たのでありました。即ち、高商而かも總べてのスポーツに活氣のある母校に、中學は勿論、女學校にさへある弓道部が無く、從つて、矢場も無い事を寧ろ不思議にさへ思ひ始めたのでした。否、不思議に思ふばかりでなく、どんなにか殘念に思つた

か知れません。

さうした疑問と不滿を抱きつゝも、只自分の運動に時たまやるのには石ころだらけの射的場でも充分間に合ふのと、自分の弓道に對する實力の貧弱さを餘りにもよく認識してゐた私は、獨りでいくら蹠いてみても如何ともする事の出來ないものとして、あつさり諦めてゐました。實際のところ、弓道部設立等の大、それ、た考は、一個の夢として、之れを完全に放擲し去つて、只默々の中に、前述べました御相談を受けるまで、二年の歳月は流れたのでした。

さて、此の御相談を受けてからも自分の實力では到底指導は愚か幹事とか何とかになつてお世話する事さへも如何かと思ひましたので、一旦はきつぱりとお斷りしたのでありました。然るに當時二年級であつた岡村さん、光武さん、土肥さん、其れに一年級の綿村さん達の餘りの眞劍さと、中村先生方のお薦めもあり、其れに私としても、斯ふした聲を自發的に一二年級の方々に聞いた時

「自分一人じや無いのだ！同じ學び舍に斯ふした熱心な同好の士が居てくれたのか—そして其の人達も矢張り吾が高商の爲弓道部の無い事をこんなにまで殘念に思つてゐて呉れるのだ!!」と、いたく感激致しまして、自分の微力を知りつゝもベストを盡してお世話する事を誓つたのでした。

其れから話は急テンポに進み、何でも十二月中頃、設立に關する會合を開き、部長に當時教鞭をおとりになつてゐた永井先生を、中村先生に實地の御指導をお願ひする事にして、それ〴〵役員等を作り、玆に芽出度く我が弓道部は設立されたのでした。併し、當時の弓道部は只出來たと云ふばかりで、練習しやうにも滿足な弓も矢も無いと云ふ始末でしたので、取敢へず弓と矢は私が心配し、熱心な部員諸君は、勇敢にも、早速例の矢場ならざる射的場で、猛練習を開始致しました。ところが當時三年では主として私と室園さんが御世話してゐたのでしたが、何しろ話が纏りやつと練習を開始しやうとするともう休暇です。

年が明けて、學校に出れば、やれ卒業試驗の準備だとか、やれ何々會の送別會だとか、やれアルバム寫眞の撮影等々で、實に氣がそわ〳〵してゐて、少しも落ち着いたお世話なり練習なりをなし得なかつたのを今でも殘念に思ひ、且當時の弓道部員諸君に誠に申譯なく思つてゐる次第であります。そして、岡村さんを次の幹事に推薦した私達は、斯ふしたあわだゝしさの中に、懷しの學窓を巣立つたのでありました。

卒業してからも二三ヶ月山口に滯在してゐた私は、在校中何等のお世話出來なかつたせめてもの申譯に、勉めて弓道部員諸君の御相談に乘り、又よき話相手たるべく勉めました。特に弓道場の件と、各部員の相互親睦には出來るだけのお力添へをした積りです。

斯くして昭和四年初夏、愈々思ひ出の山河を後に歸郷致したのでありました。其れから、やはり其の年の十一月十日の弓道場落成式に參列の榮を得てから、早

いものです、五歳の月日は流れ去りました。そして、其の五歳の歳月には、餘りにも早い、吾弓道部の成長振りです。足助幹事當時の明治神宮に於けるあの輝かしい榮冠、廣島高商弓道大會での優勝等は申すまでもなく、其の他、幾多の弓道大會で現した優秀なる成績は、如實に其れを物語つてゐるものと云へます。更に、又、今回、舊弓道部員諸氏に依る弓道部後援會の設立を見る時、往時を回想して感慨無聊のものがあるのであります。

以上何等取りとめも無い事を長々書きましたが、要するに、我が山口高商弓道部をして、今日あらしめたのは、其の設立當時にあつては、一重に母校永井、中村兩先生の御懇篤なる御指導と、同期室園さんの力が預つて大であり、更に次期の幹事岡村さん以來代々の幹事諸氏の絶大なる御盡力と、部員諸士の撓(た)ゆまぬ御精進に依るものでありまして、私の如きは、只弓道部の生れ出た古い頃を知つてゐる者の一人に過ぎないのであります。

斯くの如く、何等弓道部に功蹟なき私が、古參の意味を以つて、後援會の一榮職にある事を心苦しく感ずるものでありますが、今後とも我が愛する母校弓道部の爲には、及ばず乍ら、全力を盡す考へでありますから、何卒宜しく御願ひ致します。

終りに臨み、我が山口高商弓道部の彌榮を祈つて、擱筆致します。

（舊　稿）

雪辱を目ざして

此一文も「鴻鳳」第二卷誌上に載せたものゝ再錄である。

十月二十二日、愈々母校弓道部選手諸君が榮ある神宮大會への壯途に登ると云ふ情報を手にした僕は、異狀の興奮を禁じ得ないものがあつた。

どうか勝つてくれゝば良いが、否どうあつても優勝して欲しい！

斯ふ云ふ氣持で一杯だつた。

其れから十一月三日まで、たつた十日の日數が如何に永く思はれた事か！

愈々運命の決する最後の日、三日は來た。

其の日のラヂオニュースアナウンスを一言一句聞き洩すまいと僕は全身を耳にした。

嗚呼！併し、そこには、最後まで、我が山口高商の名はアナウンスされなかつた。

「殘念！」斯ふ叫んだのは、蓋し、僕一人ではなかつた筈だ。

恐らく我が弓道部に關係のある總べての人々の口を裂いて出た悲痛な叫びだつたに違ひない。實に殘念だ！いくら思ひ返して見ても悔しくて仕方がない。

無論我々とても勝負を第一にして居るのでは斷じてない。「勝負は時の運」位の事は遠の昔承知してゐる我々である。

併し、あの場合、僕の昂ぶつた感情は、斯ふした自己慰安では、到底解消されるものではなかつた。が併し、只徒らに切齒扼腕（せつしやくわん）して見た處で、今更始らない事だ。それかと言つて、意氣消沈するのは尙更良くない事である。

我々は玆に、冷靜に其の敗因を探究し、以て乾坤一番、次の戰に備ふる爲に、一歩力强く踏み出すべきである。

飜つて惟ふに、今度の試合に就ては、先の優勝校たる母校弓道部に對する我々の期待が、餘りに多きに過ぎたるものが有つたかも知れない。

又一方、選手諸君にして見れば、先輩の血を以て得た此の榮譽を奪はれまいとの餘りに强い責任感から、平常の實力が出でず、あゝした結果を齎したのであらう。

何は兎もあれ、其の責任を、徒らに選手諸君に問ふ前に、我々後援會全員の今後一層の精神的物質的援助を切望してやまない次第である。

而して次期の雪辱を目指して、一身同體、驀（まつしぐ）らに邁進しやうではないか！！

（舊　稿）

何？　3＋5＝9　ですつて？

學校で、生徒達が、石盤を使つて、計算してゐました。先生が質問しました。

「ルイ―五つに三つ加へると、幾つになりますか、どうだね？」

「私は、知りません。先生―」

「先生が、君に、五匹の兎を與へ、そして、君の叔父さんが、君に、重ねて、三つの兎を與へたと想像して見給へ。君は幾つ持つだらうか？」

「九匹です。先生―」

「何？　九匹だつて？　五匹の兎と三匹の兎は、九匹の兎にはなりません。もつとよく勘定して御覽なさい。」

「けれ共先生―私は、九匹持ちませう。私は私の家に、前から一匹持つてゐますから。」

とルイは答へました。（Comment! Cinq et trois font neuf？）

賣ト者

一人の賣ト者が或日、吉凶禍福を占つて居りました。彼の周りには、澤山な人が居りました。そして、彼は、多くの人を騙してゐました。突然、一人の男が、走りながらやつて來て、さうして、彼に叫びました。

「君は、來年起るところの事を知る事が出來ると云つてゐる。けれど、僕は、信ずる事が出來ない。なぜなら、君は、現在、君自身に起つてゐるところの事さへも知らない。君の内には、火事が起つてゐる。早く驅け出し給へ。若しも君の財産を救ふ事を欲するならば。」

賣ト者は、急いで、彼の家に赴きました。併し、火事は、少しも、其處には、

ありませんでした。

彼は、人が、彼を騙したと云ふ事を了解して、最早公衆の前に姿を現しませんでした。（Le charlatan.）

繪の授業

オラース・ヴェルネ（佛蘭西の戰爭畫家）は或日、レマン湖畔で、スケッチをとつて樂しんでゐた。若い英國婦人達が、彼から、數歩の處で、描いてゐた。彼女達の一人が、近寄つて來て、彼のスケッチを見て、激勵し、さうして、意見を彼に與へた。年老いた畫家は、眞面目に彼女の云ふ事を聽き、彼女に禮を言つた。

翌日、彼はロザンヌに向つて乘船した。ところが、彼は、前日の彼の小さな教師に、船上で再會した。教師は、彼に下の樣に云ひながら、馳せつけて來た。

「あなたは佛蘭西人ですから、オラース・ヴェルネを知つてゐる筈です。其の人は、船に乘つてゐると皆んなが云つてゐます。どうぞ私に教へて下さい。」

「あなたは其の人を見る事を熱望してゐますか？」

「はい、さうですとも。」

「ところで御婦人、昨日貴女から御教を受ける光榮をもつたところの彼です。」

と笑ひ乍ら彼は答へた。（Une leçon de peinture.）

病氣の子供

醫者（帽子を手にして）

「お子さんの御惡いのは此方ですか？奥さん。」

母

「此方で御座ゐます。さあ、御入り下さいませ。先生。子供が惡いので、

御呼び致したので御座ゐます。御推察下さいませ。此の可哀想な子は、どうしたわけかわかりませんが、今朝から、始終倒れるので御座ゐます。」

醫者　「轉ぶんですつて？」

母　「えゝ始終轉ぶので御座いますよ、先生。」

醫者　「地面に？」

母　「地面にです。」

醫者　「奇妙ですな……お幾つです？」

母　「四才です」

醫者　「此の御歳なら、どうしたつて、子供は、一人で、立つものですが……さうして、どうして、さうなつたのでせう？」

母　「私は、それに就て、何にもわかりません。ほんとうに。子供は、昨晩まで、非常に元氣だつたのです。そして、まるで兎の樣に家中を走り廻つてゐました。今朝何時もの樣に、私は、彼を起しました。私は、彼に、長靴下を穿かせ、半ヅボンを穿かせ、さうして、立たせたのです。バタッと彼が倒れました。」

醫者